

# 六号室

アントン・チェホフ Anton Chekhov

瀬沼夏葉訳

青空文庫



## (一)

町立病院の庭の内、牛蒡、蓐草、野麻などの簇り茂つてゐる辺に、小やかなる別室の棟がある。屋根のブリキ板は錆びて、烟突は半破れ、玄関の階段は紛聖が剥がれて、朽ちて、雑草さえのびのびと。正面は本院に向い、後方は茫広とした野良に臨んで、釘を立てた鼠色の塀が取繞されている。この尖端を上に向けている釘と、塀、さてはまたこの別室、こは露西亞において、ただ病院と、監獄とのみ見る、儂き、哀な、寂しい建物。

蓐草に掩われたる細道を行けば直ぐ別室の入口の戸で、戸を開けば玄関である。壁際や、暖炉の周辺には病院のさまざまな雑具、古寐台、汚れた病院服、ぼろぼろの股引下、青い縞の洗浚しのシャツ、破れた古靴と云つたような物が、ごたくさと、山のように積み重ねられて、悪臭を放っている。

この積上げられたる雑具の上に、いつでも烟管を嚙えて寐込っているのは、年を取つた兵隊上りの、色の褪めた徽章の附いてる軍服を始終着ているニキタと云う小使。

眼に掩い被さつて眉は山羊のようで、赤い鼻の仏頂面、背は高くはないが瘡せて節塊立って、どこにかこう一癖ありそうな男。彼は極めて頑で、何よりも秩序と云うことを大切に思つていて、自分の職務を遣り終せるには、何でもその鉄拳を以て、相手の顔だろうが、頭だろうが、胸だろうが、手当放題に殴打らなければならぬものと思ひ信じている、所謂思慮の廻わらぬ人間。

玄関の先はこの別室全体を占めている広い間、これが六号室である。浅黄色のペンキ塗の壁は汚れて、天井は燻つてゐる。冬に暖炉が烟つて炭氣に罩められたものと見える。窓は内側から見悪く鉄格子を嵌められ、床は白ちやけて、そそくれ立っている。漬けた玉菜や、ランプの燻や、南京虫や、アンモニヤの臭が混じて、入った初めの一分時は、動物園にでも行つたかのような感覚を惹起するので。

室内には螺旋で床に止められた寢台が数脚。その上には青い病院服を着て、昔風に頭巾を被つてゐる患者等が坐つたり、寢たりして、これは皆癲癲患者なのである。患者の数は五人、その中にて一人だけは身分のある者であるが他は皆卑しい身分の者ばかり。戸口から第一の者は、瘡せて脊の高い、栗色に光る鬚の、眼を始終泣腫らしている癡狂の中風患者、頭を支えてじつと坐つて、一つ所を瞞めながら、

昼夜も別かず泣き悲んで、頭を振り太息を洩し、時には苦笑をしたりして。周辺の  
 話には稀に立入るのみで、質問をされたら決して返答をしたことの無い、食う物も、  
 飲む物も、与えらるるままに、時々苦しうな咳をする。その頬の紅色や、瘡方で  
 察するに彼にはもう肺病の初期が萌ざしているのであらう。

それに續いては小体な、元氣な、頤鬚の尖つた、髪の黒いネグル人のように縮れた、  
 すこしも落着かぬ老人。彼は昼には室内を窓から窓に往来し、或はトルコ風に寢台  
 に跌を坐いて、山雀のように止め度もなく囁り、小声で歌い、ヒヒヒと頓興に笑い  
 出したりしているが、夜に祈祷をする時でも、やはり元氣で、子供のようには愉快そうにぴ  
 んぴんしている。拳で胸を打って祈るかと思えば、直に指で戸の穴を穿つたりしている。  
 これは猶太人のモイセイカと云う者で、二十年ばかり前、自分が所有の帽子製造場が  
 焼けた時に、発狂したのであつた。

六号室の中でこのモイセイカばかりは、庭にでも町にでも自由に外出のを許されてい  
 た。それは彼が古くから病院にいる為か、町で子供等や、犬に囲まれていても、決し  
 て他に何等の害をも加えぬと云うことを町の人に知られている為か、とにかく、彼は町の  
 名物男として、一人この特権を得ていたのである。彼は町を廻るに病院服のま

ま、妙な頭巾を被り、上靴を穿いてる時もあり、或は跣足でズボン下も穿かずに歩いている時もある。そうして人の門や、店前に立つては一錢ずつを請う。或家ではクワスを飲ませ、或所ではパンを食わしてくれる。で、彼はいつも満腹で、金持になつて、六号室に帰つて来る。が、その携え帰る所の物は、玄関でニキタに皆奪われてしまう。兵隊上りの小使のニキタは乱暴にも、隠を一々転覆えして、すっかり取返えしてしまふのであつた。

またモイセイカは同室の者にも至つて親切で、水を持つて来て遣り、寐る時には布団を掛けて遣りして、町から一錢ずつ貰つて来て遣るとか、各に新しい帽子を縫つて遣るとかと云う。左の方の中風患者には始終匙でもつて食事をさせる。彼がかくするのは、別段同情からでもなく、と云つて、或る情誼からするのもなく、ただ右の隣にいるグロモフと云う人に習つて、自然その真似をするのであつた。

イワン、デミトリチ、グロモフは三十三歳で、彼はこの室での身分のいいもの、元來は裁判所の警吏、また県庁の書記をも務めたので。彼は人が自分を窘逐すると云うことを苦にしている癡癡患者、常に寐台の上に丸くなって寐ていたり、或は運動のため、室を隅から隅へと歩いて見たり、坐つてゐることは殆ど稀で、始終興奮

して、燥<sup>いら</sup>氣<sup>いら</sup>して、曖<sup>あい</sup>昧<sup>まい</sup>なある待<sup>ま</sup>つことで氣<sup>き</sup>が張<sup>は</sup>つてゐる様子<sup>ようす</sup>。玄<sup>げん</sup>関<sup>かん</sup>の方<sup>ほう</sup>で微<sup>かす</sup>な音<sup>おと</sup>で  
 もするか、庭<sup>にわ</sup>で声<sup>こえ</sup>でも聞<sup>き</sup>こえるかすると、直<sup>す</sup>ぐに頭<sup>あたま</sup>を持<sup>もち</sup>上げて耳<sup>みみ</sup>を敬<sup>そ</sup>てる。誰<sup>だれ</sup>か自<sup>じ</sup>分の<sup>ぶん</sup>所<sup>ところ</sup>  
 に來<sup>き</sup>たのでは無<sup>な</sup>いか、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を尋<sup>たず</sup>ねてゐるのでは無<sup>な</sup>いかと思<sup>おも</sup>つて、顔<sup>かお</sup>には謂<sup>い</sup>うべからざる不<sup>ふ</sup>  
 安<sup>あん</sup>の色<sup>いろ</sup>が顯<sup>あら</sup>われる。さなきだに彼<sup>かれ</sup>の憔<sup>しょう</sup>悴<sup>すい</sup>した顔<sup>かお</sup>は不幸<sup>ふこう</sup>なる内<sup>ない</sup>心<sup>しん</sup>の煩<sup>はん</sup>悶<sup>もん</sup>と、長<sup>ちやう</sup>日<sup>じ</sup>  
 つげつ月<sup>つき</sup>の恐<sup>きよう</sup>怖<sup>ふ</sup>とにて、苛<sup>さい</sup>責<sup>な</sup>まれ抜<sup>ぬ</sup>いた心<sup>こころ</sup>を、鏡<sup>かがみ</sup>に写<sup>うつ</sup>したように現<sup>あら</sup>わしてゐるのに。その広<sup>ひろ</sup>  
 い骨<sup>ほね</sup>張<sup>は</sup>つた顔<sup>かお</sup>の動<sup>うご</sup>きは、如<sup>いか</sup>何<sup>なん</sup>にも変<sup>へん</sup>で病<sup>びよう</sup>的<sup>てき</sup>であつて。しかし心<sup>こころ</sup>の苦<sup>く</sup>痛<sup>つう</sup>にて彼<sup>かれ</sup>の顔<sup>かお</sup>に印<sup>いん</sup>  
 せられた緻<sup>ちみつ</sup>密<sup>みつ</sup>な微<sup>ちよう</sup>候<sup>こう</sup>は、一<sup>けん</sup>見<sup>けん</sup>して智<sup>ち</sup>慧<sup>え</sup>ありそうな、教<sup>きやう</sup>育<sup>いく</sup>ありそうな風<sup>ふう</sup>に思<sup>おも</sup>われしめ  
 た。そうしてその眼<sup>め</sup>には暖<sup>あた</sup>な健<sup>けん</sup>全<sup>ぜん</sup>な輝<sup>かが</sup>がある、彼<sup>かれ</sup>はニキタを除<sup>のぞ</sup>くの外<sup>ほか</sup>は、誰<sup>たれ</sup>に對<sup>たい</sup>しても  
 親<sup>しん</sup>切<sup>せつ</sup>で、同<sup>どう</sup>情<sup>じやう</sup>があつて、謙<sup>けん</sup>遜<sup>そん</sup>であつた。同<sup>どう</sup>室<sup>しつ</sup>で誰<sup>だれ</sup>かが釦<sup>ぼたん</sup>鈕<sup>おと</sup>を落<sup>おと</sup>したとか匙<sup>さじ</sup>を落<sup>おと</sup>  
 したとか云<sup>い</sup>う場<sup>ばい</sup>合<sup>あい</sup>には、彼<sup>かれ</sup>がまづ寢<sup>ね</sup>台<sup>だい</sup>から起<sup>おき</sup>上<sup>あが</sup>つて、取<sup>と</sup>つて遣<sup>や</sup>る。毎<sup>まい</sup>朝<sup>あさ</sup>起<sup>おき</sup>ると同<sup>どう</sup>室<sup>しつ</sup>の  
 者<sup>もの</sup>等<sup>ら</sup>にお早<sup>はや</sup>うと云<sup>い</sup>い、晚<sup>ばん</sup>にはまたお休<sup>やす</sup>息<sup>み</sup>なさいと挨<sup>あい</sup>拶<sup>さつ</sup>もする。  
 彼<sup>かれ</sup>の発<sup>はつ</sup>狂<sup>きやう</sup>者<sup>しや</sup>らしい所<sup>ところ</sup>は、始<sup>し</sup>終<sup>しゅう</sup>氣<sup>き</sup>の張<sup>は</sup>つた様子<sup>ようす</sup>と、変<sup>へん</sup>な眼<sup>めつ</sup>付<sup>つき</sup>とをすの外<sup>ほか</sup>に、時<sup>とき</sup>折<sup>おり</sup>、  
 晚<sup>ばん</sup>になると、着<sup>き</sup>てゐる病<sup>びよう</sup>院<sup>いん</sup>服<sup>ふく</sup>の前<sup>まえ</sup>を神<sup>しん</sup>經<sup>けい</sup>的<sup>てき</sup>に搔<sup>か</sup>合<sup>あ</sup>わせると思<sup>おも</sup>うと、齒<sup>は</sup>の根<sup>ね</sup>も合<sup>あ</sup>わぬ  
 までに全<sup>ぜん</sup>身<sup>しん</sup>を顫<sup>ふる</sup>わし、隅<sup>すみ</sup>から隅<sup>すみ</sup>へと急<sup>いそ</sup>いで歩<sup>あゆ</sup>み初<sup>はじ</sup>める、丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>激<sup>げき</sup>しい熱<sup>ねつ</sup>病<sup>びよう</sup>にでも俄<sup>にわか</sup>  
 に襲<sup>おそ</sup>われたよう。と、やがて立<sup>たち</sup>留<sup>どま</sup>つて室<sup>しつ</sup>内<sup>ない</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>を眴<sup>みまわ</sup>して昂<sup>かう</sup>然<sup>ぜん</sup>として今<sup>いま</sup>にも何<sup>なに</sup>

か重<sup>じゆうだい</sup>大なことを云<sup>い</sup>わんとするようない身<sup>みがま</sup>構えをする。が、また直<sup>ただち</sup>に自分<sup>じぶん</sup>の云<sup>い</sup>うことを聴<sup>き</sup>  
 く者は無<sup>ものな</sup>い、その云<sup>い</sup>うことが解<sup>わか</sup>るものは無<sup>な</sup>いとでも考<sup>かんが</sup>え直<sup>なお</sup>したかのよう<sup>いらいだ</sup>に燥<sup>いらい</sup>立<sup>だ</sup>つて、頭<sup>あたま</sup>を  
 振<sup>ふ</sup>りながらまた歩<sup>ある</sup>き出<sup>だ</sup>す。しかるに言<sup>い</sup>おうと云<sup>い</sup>う望<sup>のぞみ</sup>は、終<sup>つい</sup>に消<sup>き</sup>えず忽<sup>たちまち</sup>にして総<sup>すべ</sup>の考<sup>かんが</sup>えを圧<sup>あつし</sup>  
 去<sup>さ</sup>つて、こんどは思<sup>おも</sup>う存<sup>ぞん</sup>分<sup>ぶん</sup>、熱<sup>ねつ</sup>切<sup>せつ</sup>に、夢<sup>むちゆう</sup>中の有<sup>あり</sup>様<sup>さま</sup>で、言<sup>こと</sup>が迷<sup>まよ</sup>り出<sup>で</sup>る。言<sup>い</sup>う所<sup>ところ</sup>は  
 勿<sup>もちろん</sup>論<sup>ちん</sup>、秩<sup>ちつ</sup>序<sup>じよ</sup>なく、寐<sup>ね</sup>言<sup>こと</sup>のよう<sup>あわて</sup>で、周<sup>あわて</sup>章<sup>み</sup>て見<sup>み</sup>たり、途<sup>と</sup>切<sup>ぎ</sup>れて見<sup>み</sup>たり、何<sup>なん</sup>だか意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>の解<sup>わか</sup>  
 んことを言<sup>い</sup>うのであるが、どこかにまた善<sup>ぜん</sup>良<sup>り</sup>なる性<sup>せい</sup>質<sup>しつ</sup>が微<sup>ほ</sup>に聞<sup>きこ</sup>える、その言<sup>こと</sup>の中<sup>うち</sup>か、  
 声<sup>こえ</sup>の中<sup>うち</sup>かに、そうして彼<sup>かれ</sup>の癡<sup>ふう</sup>癡<sup>てん</sup>者<sup>しや</sup>たる所<sup>ところ</sup>も、彼<sup>かれ</sup>の人格<sup>じんかく</sup>もまた見<sup>み</sup>える。その意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>の繋<sup>つな</sup>が  
 らぬ、辻<sup>つじ</sup>妻<sup>つま</sup>の合<sup>あ</sup>わぬ話<sup>はなし</sup>は、所<sup>しよ</sup>詮<sup>せん</sup>筆<sup>ふで</sup>にすることは出来<sup>でき</sup>ぬのであるが、彼<sup>かれ</sup>の云<sup>い</sup>う所<sup>ところ</sup>を撮<sup>つま</sup>  
 で云<sup>い</sup>えば、人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の卑<sup>ひ</sup>劣<sup>れつ</sup>なること、圧<sup>あつ</sup>制<sup>せい</sup>に依<sup>よ</sup>りて正<sup>せい</sup>義<sup>ぎ</sup>の蹂<sup>じゆう</sup>躪<sup>り</sup>されてい<sup>い</sup>ること、後<sup>こう</sup>  
 世<sup>い</sup>地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>に來<sup>きた</sup>るべき善<sup>ぜん</sup>美<sup>び</sup>なる生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>のこと、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>をして一<sup>いっ</sup>分<sup>ぶん</sup>毎<sup>まい</sup>にも圧<sup>あつ</sup>制<sup>せい</sup>者<sup>しや</sup>の残<sup>ざん</sup>忍<sup>にん</sup>、  
 愚<sup>ぐ</sup>鈍<sup>どん</sup>を憤<sup>いきどお</sup>らしむる所<sup>ところ</sup>、窓<sup>まど</sup>の鉄<sup>てつ</sup>格<sup>かく</sup>子<sup>し</sup>のことなどである。云<sup>い</sup>わば彼<sup>かれ</sup>は昔<sup>むかし</sup>も今<sup>いま</sup>も全<sup>ま</sup>く歌<sup>うた</sup>い尽<sup>つく</sup>  
 されぬ歌<sup>うた</sup>を、不<sup>ふ</sup>順<sup>じゆん</sup>序<sup>じよ</sup>に、不<sup>ふ</sup>調<sup>ちやう</sup>和<sup>わ</sup>に組<sup>くみ</sup>立<sup>た</sup>るのである。



今から大凡三十四年以前、この町の一番の大通に、自分の家を所有していたグロ  
 モフと云う、容貌の立派な、金満の官吏があつて、家にはセルゲイ及びイワンと云う  
 二人の息子もある。所が、長子のセルゲイは丁度大学の四年級になつてから、  
 急性の肺病に罹り死亡してしまふ。これよりグロモフの家には、不幸が引続い  
 て来てセルゲイの葬式の終んだ一週間目、父のグロモフは詐欺と、浪費との件を以  
 て裁判に渡され、間もなく監獄の病院でチブスに罹つて死亡してしまつた。で、  
 その家と総の什具とは、棄売に払われて、イワン、デミトリチとその母親とは遂に  
 無一物の身となつた。

父の存命中には、イワン、デミトリチは大学修業の為にペテルブルグに住  
 で、月々六七十円ずつも仕送され、何不自由なく暮らしていたものが、忽にして生活は  
 一変し、朝から晩まで、安値の報酬で学科を教授するとか、筆耕をするとかと、  
 かと、奔走をしたが、それでも食うや食わずの儚なき境涯。僅な収入は母の給  
 養にも供せねばならず、彼は遂にこの生活には堪え切れず、断然大学を去つて、  
 古郷に歸つた。そうして程なく或人の世話で郡立学校の教師となつたが、それ  
 も暫時、同僚とは折合わず、生徒とは親昵まず、ここをもまた辞してしまふ。その中

に母親は死ぬ。彼は半年も無職で徘徊してただパンと、水とで生命を繋いでいたのであるが、その後裁判所の警吏となり、病を以て後にこの職を辞するまでは、ここに務を取っていたのであった。

彼は学生時代の壮年の頃でも、生得余り壮健な身体では無かった。顔色は蒼白く、姿は瘠せて、しよつちゆう風邪を引き易い、少食で落々眠られぬ質、一杯の酒にも眼が廻り、ままヒステリーが起るのである。人と交際することは彼は至つて好んでいたが、その神経質な、刺激され易い性質なるが故に、自ら務めて誰とも交際せず、随てまた親友をも持たぬ。町の人々のことは彼はいつも輕蔑して、無教育の徒、禽獸的生活と罵つて、テノルの高声で燥立っている。彼が物を言うのは憤懣の色を以てせざれば、欣喜の色を以て、何事も熱心に言うのである。で、その言う所は終に一つことに歸してしまふ。町で生活するのは好ましく無い。社会には高尚なる興味が無い。社会は曖昧な、無意味な生活を為している。圧制、偽善、醜行を逞うして、以つてこれを紛らしている。ここにおいてか奸物共は衣食に飽き、正義の人は衣食に窮する。廉直なる方針を取る地方の新聞紙、芝居、学校、公会演説、教育ある人間の団結、これらは皆必要欠ぐ可からざる

ものである。また社会しゃかい自ら悟さとつて驚おどろくようにしなければならぬとかなどとのことで。彼かれはその眼がん中ちゆうに社会しゃかいの人々ひとびとをただ二種しゆくべつに区別くべつしている、義者ぎしやと、不義者ふぎしやと、そうして婦人ふじんのこと、恋愛れんあいのことに就ついては、いつも自ら深く感じ入いつて説とくのであるが、さして自身じしんにはいまだ一度も恋愛れんあいちようものを味あじうたことは無いので。

彼かれはかくも神経質しんけいしつで、その議論ぎろんは過激かげきであつたが、町まちの人々ひとびとはそれにも拘かわらず彼かれを愛あいして、ワアニア、と愛あい嬌きやうを以もつて呼よんでいた。彼かれが天性てんせいの柔やしいのと、人ひとに親切しんせつなのと、礼儀れいぎのあるのと、品行ひんこうの方正ほうせいなのと、着古きふるしたフロックコート、病人びやうにんらしい様子ようす、家庭かていの不遇ふぐう、これらは皆総みなて人々ひとびとに温あたたかどうじよう同情どうじようを引き起ひきおこさしめたのであつた。また一面めんには彼かれは立派りっぱな教育きやういくを受け、博學多識はくがくたしきで、何なんでも知しっていると町まちの人ひとは言いうている位くらいで、彼かれはこの町まちの活いきた字引じびきとせられていた。

彼かれは非常ひじように読書どくしよを好このんで、しばしば俱樂部くらぶに行いつては、神經しんけい的に髭ひげを捻ひねりながら、雑誌ざっしや書物しょぶつを手当次第てあたりしだいに剥はいでいる、読よんでいるのではなく咀かみ問合まにあわぬので鵜呑うのみにしていると云いうような塩梅あんばい。読書どくしよは彼かれの病び的びやうてきの習慣しゆうかんで、何なんでも凡およそ手てに触ふれた所ところの物は、それがよし去年きよねんの古新聞ふるしんぶんであろうが、曆こよみであろうが、一様ように饑うえたる者もののように、きつと手てに取とつて見みるのである。家いえにいる時ときもいつも横よこになつては、やはり、

書見しよけんに耽ふけつてゐる。

(三)

ある秋あきの朝あさのこと、イワン、デミトリチは外がい套とうの襟えりを立てて泥ぬ濘かつてゐる路みちを、横よこ町ち、路次ようじと経へて、或ある町ちやうじん人の家いえに書かき付つけも持もつて金かねを取りに行いつたのであるが、やはり毎まい朝あさのようふたりにこの朝あさも氣きが引ひ立たず、沈しずんだ調ちやうし子そで或ある横よこ町ちに差さ掛かると、折おりから向むより二人ふたりの囚しゆうじん人と四人にんの銃じゆうを負おうて附つきそ添そうて来くる兵卒へいそつとに、ぱったりと出で会くわす。彼かれは何い時つが日ひも囚しゆうじん人に出で会くわせば、同どう情じやうと不ふ愉ゆ快かいの感かんに打うたれるのであるが、その日ひはまたどう云いうものか、何なんとも云いわれぬ一種しゆのいやな感かん覚かくが、常つねにもあらずむらむらと湧わいて、自分じぶんもかく枷かせを箝はめられて、同おなじ姿すがたに泥ぬ濘かの中なかを引ひかれて、獄ごくに入いられはせぬかと、遽にわかに思おもわれて慄ぞつ然ぜんとした。それから町ちやうじん人の家いえよりの帰途かえり、郵便ゆうびん局きょくの側そばで、予かねて懇意こんいな一人ひとりの警部けいぶに出遇であつたが警部けいぶは彼かれに握あく手しゆして数歩すうほばかり共ともに歩あるいた。すると、何なんだかこれかれがまた彼かれには只事ただごとでなく怪あやしく思おもわれて、家いえに帰かえつてからも一日いちにち中じゆう、彼の頭あたまから囚しゆうじん人の姿すがた、銃じゆうを負おうてる兵卒へいそつの顔かおなどが離はなれずに、眼がん前ぜん

に閃付ちらついている、この理由わけの解わからぬ煩悶はんもんが怪あやしくも絶えず彼の心かれこころを攪乱かくらんして、書物しょもつを読よむにも、考かんがうるにも、邪魔じゃまをする。彼は夜よるになつても灯あかりをも点つけず、夜よもすがら眠ねむらず、今いまにも自分じぶんが捕縛ほばくされ、獄ごくに繋がれはせぬかとただそればかりを思い悩なやんでいるのであつた。

しかし無論むろん、彼は自身かれじしんに何の罪なんつみもなきこと、また将来しょうらいにおいても殺人さつじん、窃盜せつとう、放火ほうかなどの犯罪はんざいは断だんじてせぬとは知しっているが、また独ひとりづくづくとも思おもうたのであつた。故意こいならず犯罪はんざいを為なすことが無いとも云いわれぬ、人の讒言ざんげん、裁判さいばんの間違まちがいなどはあり得うべからざることだとは云いわれぬ、そもそも裁判さいばんの間違まちがい、今日の裁判さいばんの状じやう態たいにては、最もあり得うべきことなので、総そうじて他人たにんの艱難かんなんに對たいしては、事務じむ上う、職務上しよくむじやうの關係かんけいをもっている人々ひとびと、例たとえば裁判官さいばんかん、警官けいがん、医師いし、とかといふものは、年月ねんげつの経過けいかすると共に、習慣しゆかんに依よつて遂ついにはその相手あいての被告ひこく、或あるは患か者んじやに對たいして、単たんに形式けいしき以上いじやうの關係かんけいをもたぬように望のぞんでも出来できぬように、この習慣しやうかんと云いふ奴やつがさせてしまふ、早はやく言いえ彼等かれらは恰あたか、庭にわに立たつて羊ひつじや、牛うしを屠ほふり、その血ちには氣きが着つかぬ所ところの劣等れつとうの人間にんげんと少しも選えらぶ所ところは無いのだ。

翌朝よくあさイワン、デミトリチは額ひたいに冷汗ひやあせをびつしよりと搔かいて、床とこから吃驚びっくりして跳はねお

起きた。もう今にも自分が捕縛されると思われて。そうして自らまた深く考えた。かくまでも昨日の奇しき懊惱が自分から離れぬとして見れば、何か訳があるのである、さなくともこの忌むべき考がこんな執念く自分に着纏うている訳は無いと。

『や、巡査が徐々と窓の傍を通つて行つた、怪しいぞ、やや、また誰か二人家の前に立ちどま立留っている、何故黙っているのだろうか？』

これよりしてイワン、デミトリは日夜をただ煩悶に明し続ける、窓の傍を通る者、庭に入る者は皆探偵かと思われる。正午になると毎日警察署長が、町尽頭の自分の邸から警察へ行くので、この家の前を二頭馬車で通る、するとイワン、デミトリはその度毎、馬車が余り早く通り過ぎたようだとか、署長の顔付が別であったとか思つて、何んでもこれは町に重大な犯罪が露顕されたのでそれを至急報告するのであるなどと極めて、頻りにそれが気になつてならぬ。

家主の女主人の処に見知らぬ人が来さえすればそれも苦になる。門の呼鈴が鳴る度に惴々しては顫上る。巡査や、憲兵に遇いでもすると故と平気を粧うとして、微笑して見たり、口笛を吹いて見たりする。如何なる晩でも彼は拘引されるのを待ち構えていぬ時とは無い。それが為に終夜眠られぬ。が、もしこんなことを女主人

にでも嗅付けられたら、何か良心に咎められることがあると思われよう、そんな疑でも起されたら大変と、彼はそう思つて無理に毎晩眠た振をして、大酄をさえ発している。しかしこんな心遣は事実においても、普通の論理においても考えて見れば実に愚々しい次第で、拘引されるだの、獄舎に繋がるなど云うことは良心にさえ疚しい所が無いならば少しも恐怖るに足らぬこと、こんなことを恐れるのは精神病に相違なきこと、と、彼も自ら思うてここに至らぬのでも無いが、さてまた考えれば考うる程迷つて、心中はいよいよ苦悶と、恐怖とに圧しられる。で、彼ももう思慮えることの無益なのを悟り、すっかり失望と、恐怖との淵に沈んでしまったのである。

彼はそれより独居して人を避け初めた。職務を取るのには前にもいやであつたが、今はなお一層いやで堪らぬ、と云うのは、人が何時自分を欺して、隠にでもそつと賄賂を突込みはせぬか、それを訴えられでもせぬか、或は公書の如きものに詐欺同様の間違でもしはせぬか、他人の錢でも無くしたりしはせぬか。と、無暗に恐くてならぬので。

春になつて雪も次第に解けた或日、墓場の側の崖の辺に、腐爛した二つの死骸が見付けた。それは老婆と、男の子とで、故殺の形跡さえあるのであつた。町ではもう到る所のこの死骸のことと、下手人の噂ばかり、イワン、デミトリチは自分が殺したと思われは

せぬかと、またしても気が気ではなく、通を歩きながらもそう思われまいと微笑しながら行ったり、知人に遇いでもすると、青くなり、赤くなりして、あんな弱者共を殺すなどと、これ程憎むべき罪悪は無いなど、云っている。が、それもこれも直に彼を疲労からしてしまう。彼はそこでふと思いついた、自分の位置の安全を計るには、女主人の穴蔵に隠れているのが上策と。そうして彼は一日中、また一晩中、穴蔵の中に立尽し、その翌日もやはり出ぬ。で、身体が甚く凍えてしまったので、詮方なく、夕方になるのを待って、こっそりと自分の室には忍び出て来たものの、夜明まで身動もせず、室の真中に立っていた。すると明方、まだ日の出ぬ中、女主人の方へ暖炉造の職人が来た。イワン、デミトリチは彼等が厨房の暖炉を直しに来たのであるのは知っていたのであるが、急に何だかそうでは無いように思われて来て、これはきつと警官が故と暖炉職人の風体をして来たのであらうと、心は不覚、気は動顛して、いきなり、室を飛出したが、帽も被らず、フロックコートも着ずに、恐怖に駆られたまま、大通を真一文字に走るのであった。一匹の犬は吠えながら彼を追う。後の方では農夫が叫ぶ。イワン、デミトリチは両耳がガンとして、世界中のあらゆる圧制が、今彼の直ぐ背後に迫って、自分を追駆けて来たかのように思われた。



彼は捕えられて家に引返されたが、女主人は医師を招びに遣られ、ドクトル、アン  
ドレイ、エヒミチは来て彼を診察したのであつた。

そうして頭を冷す薬と、桂梅水とを服用するようにと云つて、いやそうに頭を振つ  
て、立帰り際に、もう二度とは来ぬ、人の気の狂う邪魔をするにも当たらないからとそう  
云つた。

かくてイワン、デミトリチは宿を借り、療治することも、銭の無いので出来兼  
ぬる所から、幾干もなくして町立病院に入れられ、梅毒病患者と同室す  
ることとなつた。しかるに彼は毎晩眠らずして、我儘を云つては他の患者等の邪魔  
をするので、院長のアンドレイ、エヒミチは彼を六号室の別室へ移したのであつ  
た。

一年を経て、町ではもうイワン、デミトリチのことは忘れてしまった。彼の書物は女  
主人が櫥の中に積重ねて、軒下に置いたのであるが、どこからともなく、子供等が  
寄つて来ては、一冊持ち行き、二冊取去り、段々に皆何れへか消えてしまった。

(四)

イワン、デミトリチの左の方の隣は、猶太人のモイセイカであるが、右の方にいる者は、まるきり意味の無い顔をしている、油切つて、真円い農夫、疾うから、思慮も、感<sup>かん</sup>覚<sup>かく</sup>も皆無になつて、動きもせぬ大食いな、不汚極る動物で、始終鼻を突くような、胸<sup>むね</sup>の悪<sup>わる</sup>くなる臭<sup>しゅう</sup>氣<sup>き</sup>を放<sup>はな</sup>つてゐる。

彼の身の周りを掃除するニキタは、その度に例の鉄拳を振つては、力の限り彼を打つのであるが、この鈍<sup>にぶ</sup>き動物は、音をも立てず、動きをもせず、眼の色にも何の感<sup>かん</sup>じをも現<sup>あらわ</sup>わさぬ。ただ重い樽<sup>たる</sup>のように、少し蹠<sup>すこ</sup>踰<sup>よろ</sup>るのを見るのも氣味<sup>きみ</sup>が悪い位<sup>くらい</sup>。

六号室の第五番目は、元來郵便局とやうに勤めた男で、氣の善いような、少し狡猾<sup>さう</sup>いような、脊<sup>せ</sup>の低い、瘡<sup>や</sup>せたブロンジンの、利<sup>り</sup>発<sup>はつ</sup>らしい瞭<sup>はつきり</sup>然とした愉快な眼付、ちよつと見るとまるで正氣<sup>しやうき</sup>のようである。彼は何か大切な秘密な物をもつてゐると云うような風<sup>ふう</sup>をしている。枕の下や、寐<sup>ね</sup>台<sup>だい</sup>のどこかに、何かをそツと隠<sup>かく</sup>して置く、それは盜<sup>ぬす</sup>まれるとか、奪<sup>うば</sup>われるとか、云う氣遣<sup>きづかい</sup>のためではなく人に見られるのが恥<sup>はづ</sup>かしいのでそうして隠<sup>かく</sup>して置く物がある。時々同室の者等に脊<sup>せ</sup>を向けて、独窓の所に立つて、何かを胸<sup>むね</sup>に着<sup>つ</sup>けて、頭<sup>かしら</sup>を屈<sup>かが</sup>めて熟視<sup>み</sup>つてゐる様子。誰かもし近<sup>ちか</sup>着<sup>かつ</sup>でもすれば、極惡<sup>きまわる</sup>そうに急<sup>い</sup>いで

胸から何かを取って隠してしまう。しかしその秘密は直に解るのである。

『私をお祝いなすって下さい。』

と、彼は時々ワン、デミトリチに云うことがある。

『私は第二等のスタニスラウの勲章を貰いました。この第二等の勲章は、全体的なら外国人でなければ貰えないのですが、私にはその、特別を以てね、例外と見えます。』

と、彼は訝かるようにちよつと眉を寄せて微笑する。

『実を申しますと、これはちと意外でしたので。』

『私はどうもそう云うものに就いては、まるで解らんです。』

と、イワン、デミトリチは愁わしそうに答える。

『しかし私が早晩手に入れようと思ひますのは、何だか知っておいになりますか。』  
もと ゆうびんきよくいん  
先の郵便局員は、さも狡猾そうに眼を細めて云う。

『私はきつとこんどは瑞典の北極星の勲章を貰おうと思つておるです、その勲章こそは骨を折る甲斐のあるものです。白い十字架に、黒リボンの附いた、それは立派です。』

この六号室程、単調な生活は、どこを尋ねても無いであろう。朝には患者等は、中風患者と、油切った農夫との外は皆玄関に行つて、一つ大盥で顔を洗ひ、病院服の裾で拭き、ニキタが本院から運んで来る、一杯に定められたる茶を錫の器で啜るのである。正午には酔く漬けた玉菜の牛肉汁と、飯とで食事をする。晩には昼食の余りの飯を食べるので。その間は横になるとも、睡るとも、空を眺めるとも、室の隅から隅へ歩くとも、こうして毎日を送っている。

新しい人の顔は六号室では絶えて見ぬ。院長アンドレイ、エヒミチは新たな癲癲患者はもう疾くより入院せしめぬから。また誰とてこんな癲癲者の室に參觀に来る者も無いから。ただ二ヶ月に一度だけ、理髪師のセミヨン、ラザリチばかりここへ来る。その男はいつも酔つてニコニコしながら遣つて来て、ニキタに手伝わせて髪を刈る、彼が見えたと患者等は囁々と云つて騒ぎ出す。

かく患者等は理髪師の外には、ただニキタ一人、それより外には誰に遇うことも、誰を見ることも叶わぬ運命に定められていた。

しかるに近頃に至つて不思議な評判が院内に伝わった。

院長が六号室に足繁く訪問し出したとの風評。

## (五)

不思議な風評である。

ドクトル、アンドレイ、エヒミチ、ラアギンは風変わりな人間で、青年の頃には甚敬虔で、身を宗教上に立てようと、千八百六十三年に中学を卒業すると直ぐ、神学大学に入ろうと決した。しかるに医学博士にして、外科専門家なる彼が父は、断乎として彼が志望を拒み、もし彼にして司祭となつた暁は、我が子とは認めぬとまで云張つた。が、アンドレイ、エヒミチは父の言ではあるが、自分はこれまで医学に対して、また一般の専門学科に対して、使命を感じたことは無かつたと告白している。とにかく、彼は医科大学を卒業して司祭の職には就かなかつた。そうして医者として身を立つる初めにおいても、なお今日の如く別段宗教家らしい所は少なかつた。彼の容貌はぎすぎすして、どこか百姓染みて、頤鬚から、ベツそりした髪、ぎこちない不態な恰好は、まるで大食の、舌抜の、頑固な街道端の料理屋なんどの主人のようで、素氣無い顔には青筋が頭れ、眼は小さく、鼻は赤く、肩幅広く、脊高

く、手足が図抜けて大きい、その手で掴まえられようものなら呼吸も止まりそう。それでいて足音は極く静で、歩く様子は注意深い。忍足のようである。狭い廊下で人に出遇うと、まず道を除けて立留り、『失敬』と、さも太い声で云いそうだが、細いテノルでそう挨拶する。彼の頸には小さい腫物が出来ているので、常に糊付シャツは着ないで、柔らかな麻布か、更紗のシャツを着ているので。そうしてその服装は少しも医者らしい所は無く、一つフロックコートを十年も着続けている。稀に猶太人の店で新しい服を買って来ても、彼が着るとやはり皺だらけな古着のように見えるので。一つフロックコートで患者も受け、食事もし、客にも行く。しかしそれは彼が吝嗇なるのではなく、扮装などには全く無頓着なのによるのである。

アンドレイ、エヒミチが新に院長としてこの町に来た時は、この病院の乱脈は名状すべからざるもので。室内と云わず、廊下と云わず、庭と云わず、何とも云われぬ臭気が鼻を衝いて、呼吸をするさえ苦しい程。病院の小使、看護婦、その子供等などは皆患者の病室に一所に起臥して、外科室には丹毒が絶えたこと無し。患者等は油虫、南京虫、鼠の族に責め立てられて、住んでいることも出来ぬと苦情を云う。器械や、道具などは何も無く外科用の刃物が二つあるだけで体温

器すら無いのである。浴盤には馬鈴薯が投込んであるような始末、代診、会計、洗濯女は、患者を掠めて何とも思わぬ。話には前の院長はままだ病院のアルコールを密売し、看護婦、婦人患者を手当次第妾としていたと云う。で、町では病院のこんな有様を知らぬのでは無く、一層棒大にして乱次の無いことを評判していたが、これに対しては人々は至つて冷淡なもので、寧ろ病院の弁護をしていた位。病院などに入るものは、皆病人や百姓共だから、その位な不自由は何でも無いことである、自家にいたならば、なおさら不自由をせねばなるまいとか、地方自治体の補助もなくて、町独立で立派な病院の維持されようは無いか、とにかく悪いながらも病院のあるのは無いよりも増であるとかと。

アンドレイ、エヒミチは院長としてその職に就いた後かかる乱脈に対して、果してこれを如何様に所置したろう、敏捷と院内の秩序を改革したろうか。彼はこの不順序に対しては、さのみ気を留めた様子はなく、ただ看護婦などの病室に寝ることを禁じ、機械を入れる戸棚を二個備付けたばかりで、代診も、会計も、洗濯婦も、元のままにして置いた。

アンドレイ、エヒミチは知識と廉直とを頗る好みかつ愛していたのであるが、さて

彼は自分の周囲にはそう云う生活せいかつを設けることは到底出来ぬのであつた。それは氣きり力ちからと、権けん力りきにおける自信じしんとが足りぬので。命令めいれい、主しゅ張ちやう、禁止きんし、こう云うことは凡て彼には出来ぬ。丁度ちやうど声を高めて命令めいれいなどは決して致さぬと、誰にか誓ちかでも立てたかのように、くれとか、持つて来いとかとはどうしても言えぬ。で、物ものが食たべたくなつた時には、何時いつも躊躇ちゆうちょしながら咳せき払い、そうして下女げじよに、茶ちやでも呑みしたいものだとか、飯めしにしたいものだとか云うのが常である、それ故に會計係かいけいがかりに向つても、盗人ぬすではならぬなどとは到底云われぬ。無論放逐むろんほうちくすることなどは為し得ぬので。人が彼を欺あざむいたり、或は諂あをいつたり、或は不正ふせいの勘定書かんじやうがきに署名しよめいをするを願ねがいでもされると、彼は蝦えびのように真赤まっかになつてひたすらに自分の悪いことを感じはする。が、やはり勘定書かんじやうがきには署名しよめいをして遣やると云うような質たち。  
初はじめにアンドレイ、エヒミチは熱心ねっしんにその職しよくを励はげみ、毎日朝まいにちあさから晩ばんまで、診察しんさつをしたり、手術しゆじゆつをしたり、時には産婆さんばをもしたのである、婦人等ふじんらは皆彼を非常ひじやうに褒ほめて名医めいいである、殊ことに小兒科しやうにか、婦人科ふじんかに妙みやうを得ていると言いひ囃はやしていた。が、彼は年月ねんげつの経たつと共に、この事業じぎやうの単調たんちやうなのと、明瞭めいりやうに益えきの無いのを認みとめるに従したがつて、段々だんだんと厭あきて來た。彼は思おもうたのである。今日は三十人きやうにんの患者かんじやを受ければ、明日は三十



五人来る、明後日は四十人に成つて行く、かく毎日、毎月、同事を繰返し、打  
 續けては行くものの、市中の死亡者の数は決して減じぬ。また患者の足も依然とし  
 て門には絶えぬ。朝から午まで来る四十人の患者に、どうして確実な扶助を与えるこ  
 とが出来よう、故意ならずとも虚偽を為しつゝあるのだ。一統計年度において、一万二  
 千人の患者を受けたとすれば、即ち一万二千人は欺かれたのである。重い患者を病  
 院に入、院させて、それを学問の規則に従つて治療することは出来ぬ。如何なれ  
 ば規則はあつても、ここに学問は無いのである。哲学を捨てしまつて、他の医師等  
 ように規則に従つて遣らうとするのには、第一に清潔法と、空氣の流通法とが欠く  
 べからざる物である。しかるにこんな不潔な有様では駄目だ。また滋養物が肝心で  
 ある。しかるにこんな臭い玉菜の牛肉汁などでは駄目だ、また善い補助者が必要であ  
 る、しかるにこんな盗人ばかりでは駄目だ。

そうして死が各人の正當な終であるとするなれば、何の為に人々の死の邪魔をす  
 るのか。仮にある商人とか、ある官吏とかが、五年十年余計に生延びたとして見た所  
 で、それが何になるか。もしまた医学の目的が薬を以て、苦痛を薄らげるものと為すな  
 れば、自然ここに一つの疑問が生じて来る。苦痛を薄らげるのは何の為か？ 苦痛は人を

完全かんぜんに向わしむるものと云うでは無いなか、また人類じんるいが果して丸薬がんやくや、水薬すいやくで、その苦痛くつうが薄らぐものなら、宗教しゅうきようや、哲学てつがくは必要ひつようが無くなつたと棄るすつに至ろう。プシキンは死しに先さきつて非常ひじように苦痛くつうを感じ、不幸ふこうなるハイネは数年間すうねんかん中風ちゆうふうに罹かつて臥ふしていた。して見れば原始虫げんしちゆうの如き我々われわれに、せめて苦難くなんちようものが無かつたならば、まづ含蓄まんちくの無い生活せいかつとなつてしまふ。からして我々われわれは病氣びようきするのは寧ろ当然むしとうぜんでは無いなか。

かかる議論ぎろんにまるで心を圧おしられたアンドレイ、エヒミチは遂ついに匙さじを投なげて、病院びやういんにも毎日まいにちは通かよわなくなるに至いたつた。

# (六)

彼の生活せいかつはかくの如ごとくにして過ぎ行ゆいた。朝あさは八時じに起き、服ふくを着換きかえて茶ちやを呑のみ、それから書斎しよさいに入るはいか、或あるは病院びやういんに行くかである。病院びやういんでは外来患者がいらいかんじやがもう診察しんさつを待構まちかまえて、狭い廊下せまろうかに多人数詰たにんずつめ掛かけている。その側そばを小使こつかいや、看護婦かんごふが靴くつで煉瓦れんがの床ゆかを音高おとたかく踏鳴ふみならして往來おうらいし、病院服びやういんふくを着きている瘡やせた患者等かんじやらが通とおつ

たり、死人も昇ぎ出す、不潔物を入れた器をも持つて通る。子供は泣き叫ぶ、通風  
 はする。アンドレイ、エヒミチはこう云う病院の有様では、熱病患者、肺病  
 患者には最もよくないと、始終思い思ひするのであるが、それをまたどうすることも出  
 来ぬのであつた。

代診のセルゲイ、セルゲイチは、いつも控所に院長の出で来るのを待つてい  
 る。この代診は脊の小さい、丸く肥つた男、頬髯を綺麗に剃つて、丸い顔はいつもよ  
 く洗われていて、その氣取つた様子で、新しいゆつとりした衣服を着け、白の襟飾を  
 した所は、まるで代診のようではなく、元老議員とでも言いたいようである。彼は町  
 に沢山の病家の顧主を持つてゐる。で、彼は自分を心窃に院長より遙に実  
 際において、経験に積んでゐるものと認めていた。何となれば院長には町に顧主  
 の病家などは少しも無いのであるから。控所は、壁に大きい額縁に填つた聖像  
 が懸つていて、重い灯明が下げてある。傍には白い布を被せた読經台が置かれ、一  
 方には大主教の額が懸けてある、またスウヤトコルスキ修道院の額と、枯れた  
 花環とが懸けてある。この聖像は代診自ら買つてここに懸けたもので、毎日曜日、  
 彼の命令で、誰か患者の一人が、立つて、声を上げて、祈祷文を読む、それから彼

は自身で、各病室を、香炉を提げて振りながら廻る。

患者は多いのに時間は少ない、で、いつも極く簡単な質問と、塗薬か、※麻子油位の薬を渡して遣るのに留まっている。院長は片手で頼杖を突きながら考

込んで、ただ機械的に質問を掛けるのみである。代診のセルゲイ、セルゲイチが時々手を擦り擦り口を入れる。『この世には皆人が病気になる、入用なもの

がありません、何となれば、これ皆親切な神様に不熱心でありますから。』診察

の時に院長はもう疾うより手術をすることは止めていた。彼は血を見るさえ不愉

快に感じていたからで。また子供の咽喉を見るので口を開かせたりする時に、子供が泣

叫び、小さい手を突張ったりすると、彼はその声で耳がガンとしてしまつて、眼が廻つ

て涙が滴れる。で、急いで薬の処方云つて、子供を早く連れて行つてくれと手を振る。

診察の時、患者の臆病、訳の解らぬこと、代診の傍に居ること、壁に懸つて

る画像、二十年以上も相変らずに掛けて居る質問、これらは院長をして少から

ず退屈せしめて、彼は五六人の患者を診察し終ると、ふいと診察所から出て行つ

てしまう。で、後の患者は代診が彼に代つて診察するのであつた。

院長アンドレイ、エヒミチは疾から町の病家をもたぬのを、却つていい幸に、誰

も自分の邪魔をするものは無いと云う考で、家に帰ると直ぐ書齋に入り、読む書物の沢山あるので、この上なき満足で以て書見に耽るのである、彼は月給を受取るす直ぐ半分は書物を買うのに費やす、その六間借りている室の三つには、書物と古雑誌とで殆ど埋まっている。彼が最も好む所の書物は、歴史、哲学で、医学上の書物は、ただ『医者』と云う一雑誌を取っているのに過ぎぬ。読書し初めるといつも数時間は続様に読むのであるが、少しもそれで疲労ぬ。彼の書見は、イワン、デミトリチのように神経的に、迅速に読むのではなく、徐に眼を通して、気に入った所、了解し得ぬ所は、留り留りしながら読んで行く。書物の側にはいつもウオツカの壘を置いて、塩漬の胡瓜や、林檎が、デスクの羅紗の布の上に置いてある。半時間毎位に彼は書物から眼を離さずに、ウオツカを一杯注いで呑乾し、そうして矢張見ずに胡瓜を手探で食い欠ぐ。

三時になると彼は徐に厨房の戸に近づいて咳払いをして云う。

『ダリユシカ、昼食でも遣りたいものだな。』

不味そうに取揃えられた昼食を為し終えると、彼は両手を胸に組んで考えながら室内を歩き初める。その中に四時が鳴る。五時が鳴る、なお彼は考えながら歩いている。

すると、時々厨房の戸が開いて、ダリユシカの赤い寐惚顔が覗られる。

『旦那様、もうビールを召上ります時分では御座りませんか。』

と、彼女は氣を揉んで問う。

『いやまだ……もう少し待とう……もう少し……。』

と、彼は云う。

晩にはいつも郵便局長のミハイル、アウエリヤヌイチが遊びに来る。アンドレイ、エヒミチに取つてはこの人間ばかりが、町中で一人氣の置けぬ親友なので。ミハイル、アウエリヤヌイチは元は富んでいた大地主、騎兵隊に属していた者、しかるに漸々身代を耗つてしまつて、貧乏し、老年に成つてから、遂にこの郵便局に入つたので。至つて元氣な、壮健な、立派な白い頬鬚の、快活な大声の、しかも氣の善い、感情の深い人間である。しかしまた極く腹立易い男で、誰か郵便局に来た者で、反対でもするとか、同意でもせぬとか、理屈でも並べようものなら、眞赤になつて、全身を顫わして怒立ち、雷のような声で、黙れ！と一喝する。それ故に郵便局に行くのは怖いと云うは一般の評判。が、彼は町の者をかく部下のようにあつたか、あつたか、遇うにも拘らず、院長アンドレイ、エヒミチばかりは、教育があり、かつ高

尚<sup>う</sup>な心<sup>こころ</sup>をもっている、敬<sup>うやま</sup>いかつ愛<sup>あい</sup>していた。

『やあ、私<sup>わたし</sup>です。』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチはいつものようにこう云<sup>い</sup>いながら、アンドレイ、エヒミチの家<sup>いえ</sup>に入<sup>はい</sup>つて来<sup>き</sup>た。

二人<sup>ふたり</sup>は書<sup>しょ</sup>斎<sup>さい</sup>の長椅子<sup>ながいす</sup>に腰<sup>こし</sup>を掛<sup>か</sup>けて、暫<sup>ざん</sup>時<sup>じ</sup>荻<sup>はこ</sup>を吹<sup>ふ</sup>かしている。

『ダリユシカ、ビールでも欲<sup>ほ</sup>しいな。』

と、アンドレイ、エヒミチは云<sup>い</sup>う。

初<sup>はじ</sup>めの壇<sup>びん</sup>は二人<sup>ふたり</sup>共<sup>とも</sup>無<sup>む</sup>言<sup>ごん</sup>の行<sup>ぎやう</sup>で吞<sup>の</sup>乾<sup>みほ</sup>してしまふ。院<sup>いんちよう</sup>長<sup>ちやう</sup>は考<sup>かんが</sup>え込<sup>こ</sup>んでいる、ミハイ

ル、アウエリヤヌイチは何<sup>なに</sup>か面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>い話<sup>はなし</sup>をしようとして、愉<sup>ゆ</sup>快<sup>かい</sup>そうになっている。

話<sup>はなし</sup>はいつも院<sup>いんちよう</sup>長<sup>ちやう</sup>から、初<sup>はじ</sup>まるので。

『何<sup>なん</sup>と残<sup>ざん</sup>念<sup>ねん</sup>なことじや無<sup>な</sup>いですかなあ。』

と、アンドレイ、エヒミチは頭<sup>かしら</sup>を振<sup>ふ</sup>りながら、相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>の眼<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>ずに徐<sup>のろ</sup>ろと話<sup>はなし</sup>出<sup>だ</sup>す。彼<sup>かれ</sup>は話<sup>はなし</sup>をする時<sup>とき</sup>に人<sup>ひと</sup>の眼<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>ぬのが癖<sup>くせ</sup>。

『我<sup>われ</sup>々の町<sup>まち</sup>に話<sup>はなし</sup>の面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>い、知<sup>ち</sup>識<sup>しき</sup>のある人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の皆<sup>かい</sup>無<sup>む</sup>なのは、実<sup>じつ</sup>に遺<sup>い</sup>憾<sup>かん</sup>なことじやありませんか。これは我<sup>われ</sup>々に取<sup>と</sup>つて大<sup>おお</sup>なる不<sup>ふ</sup>幸<sup>こう</sup>です。上<sup>じやう</sup>流<sup>りゆう</sup>社<sup>しゃ</sup>会<sup>かい</sup>でも卑<sup>ひ</sup>劣<sup>れつ</sup>なこと以<sup>い</sup>上<sup>じやう</sup>

にはその教育の程度は上らんですから、全く下等社会と少しも異らんです。』

『それは真実です。』と、郵便局長は云う。

『君も知つていられる通り。』

と、院長は静な声で、また話続けるのであつた。

『この世の中には人間の知識の高尚な現象の外には、一として意味のある、興味のあるものは無いのです。人智なるものが、動物と、人間との間に、大なる限界

をなしておつて、人間の靈性を示し、或る程度まで、実際に無い所の不死の換りを

為しているのです。これに由つて人智は、人間の唯一の快樂の泉となつてゐる。し

かるに我々は自分の周囲に、些も知識を見ず、聞かずで、我々はまるで快樂を奪わ

れてゐるようなものです。勿論我々には書物がある。しかしこれは活きた話とか、

交際とかと云うものとはまた別で、余り適切な例ではありませんが、例えば書物は

ノタで、談話は唱歌でしょう。』

『それは真実です。』と、郵便局長は云う。

二人は黙る。厨房からダリユシカが鈍い浮かぬ顔で出て来て、片手で頬杖をして、話

を聞こうと戸口に立留つてゐる。



『ああ君は今の人間から知識をお望みになるのですか？』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチは嘆息して云うた。そうして彼は昔の生活が健全で、愉快で、興味のあつたこと、その頃の上流社会には知識があつたとか、またその社会では廉直、友誼を非常に重んじていたとか、証文なしで金を貸したとか、貧窮な友人に扶助を与えぬのを恥としていたとか、愉快的行軍や、戦争などのあつたこと、面白い人間、面白い婦人のあつたこと、また高加索と云う所は実にいい土地で、或る騎兵大隊長の夫人に愛者があつて、いつでも身に士官の服を着けて、夜になると一人で、カフカズの山中を案内者もなく騎馬で行く。話に聞くと、何でも韃靼人の村に、その夫人と、土地の某公爵との間に小説があつたとのことだ、とかと。

『へへえ。』

と、ダリユシカは感心して聞いている。

『そうしてよく呑み、よく食つたものだ。また非常な自由主義の人間などもあつたツケ。』

アンドレイ、エヒミチは聞いてはいたが、耳にも留らぬ風で、何かを考えながら、ビー

ルをチビリチビリと呑んでいる。

『私はどうかすると知識のある秀才と話をしていることを夢に見ることがあります。』  
と、院長は突然にミハイル、アウエリヤヌイチの言を遮つて言うた。

『私の父は私に立派な教育を与えたです、しかし六十年代の思想の影響で、私を医者としてしまったが、私がもしその時に父の言う通りにならなかったなら、今頃は現代思潮の中心心となつていたであろうと思われます。その時にはきつと大学の分科の教授にでもなつていたのでしよう。無論知識なるものは、永久のものでは無く、変遷して行くものですが、しかし生活と云うものは、忌々しい輪索です。思想の人間が成熟の期に達して、その思想が発展される時になると、その人間は自然自分がもうすでにこの輪索に掛つてゐる遁れる路の無くなつてゐるのを感じます。實際人間は自分の意旨に反して、或は偶然なことの為に、無から生活に喚出されたものであるのです……。』

『それは真実です。』

と、ミハイル、アウエリヤヌイチは云う。

アンドレイ、エヒミチはやはり相手の顔を見ずに、知識ある者の話ばかりを続ける、ミ

ハイル、アウエリヤヌイチは注意して聴いていながら『それは真実です。』と、そればかりを繰返していた。

『しかし君は靈魂の不死を信じなさらないのですか？』  
と、俄にミハイル、アウエリヤヌイチは問う。

『いや、ミハイル、アウエリヤヌイチ、信じません、信じる理由が無いのです。』と、院長は云う。

『實を申すと私も疑っているのです。しかしもつとも、私は或時は死なん者のような感もするですがな。それは時時こう思うことがあるです。』

こんな老朽な体は死んでもいい時分だ、とそう思うと、忽ちまた何やら心の底で声がする、氣遣うな、死ぬことは無いと云っているような。』

九時少し過ぎ、ミハイル、アウエリヤヌイチは帰らんとて立上り、玄関で毛皮の外套を引掛けながら溜息して云うた。

『しかし我々は随分酷い田舎に引込んだものさ、残念なのは、こんな処で往生をするのかと思うと、ああ……。』

## (七)

親友を送出して、アンドレイ、エヒミチはまた読書を初めるのであった。夜は静で何の音もせぬ。時は留つて院長と共に書物の上に途絶えてしまったかのよう。この書物と、青い傘を掛けたランプとの外には、世にまた何物もあらぬかと思わるる静けさ。院長の可畏き、無人相の顔は、人智の開発に感ずるに従つて、段々と和ぎ、微笑をさえ浮べて来た。

『ああ、どうして、人は不死の者では無いか。』  
と、彼は考えている。『脳髓や、視官、言語、自覚、天才などは、終には皆土中に入つてしまつて、やがて地殻と共に冷却し、何百万年と云う長い間、地球と一所に意味もなく、目的も無く廻り行くようになるとなれば、何の為にこんな物があるのか……。』冷却して後、飛散するとすれば、高尚なる殆ど神の如き智力を備へたる人間を、虚無より造出する必要はない。そうして恰も嘲るが如くに、また人を粘土に化する必要は無い。ああ物質の新陳代謝よ。しかしながら不死の代替を以て、自分を慰むると云うことは臆病ではなからうか。自然において起る所の無意識

なる作用は、人間の無智にも劣っている。何となれば、無智には幾分か、意識と意旨とがある。が、作用には何も無い。死に對して恐怖を抱く臆病者は、左のことを以て自分を慰めることが出来る。即ち彼の体を將來、草、石、墓の中に入れて、生活すると云うことを以て慰むることが出来る。

『それとも物質の変換……物質の変換を認めて、直に人間の不死と為すと云うのは、恰も高価なヴァイオリンが破れた後で、その明箱が換つて立派な物となると同じように、誠に訳の解らぬことである。』

時計が鳴る。アンドレイ、エヒミチは椅子の倚掛に身を投げて、眼を閉じて考える。そうして今読んだ書物の中の面白い影響で、自分の過去と、現在とに思を及すのであつた。

『過去は思出すのもいやだ、と云つて、現在もまた過去と同様ではないか。』  
 と、彼はそれから患者等のこと、不潔な病室の中に苦しんでいること、などを思い起す。『まだ眠らないで南京虫と戦っている者もあるう、或は強く繃帯を締められて悩んで呻っている者もあるう、また或る患者等は看護婦を相手に骨牌遊をしている者もあるう、或はヴォツカを呑んでいる者もあるう、病院の事業は総て二十年前と

少しも変らぬ。窃盗、姦淫、詐欺の上に立てられているのだ。であるから、病院は依然として、町の住民の健康には有害で、かつ不徳義なものである。』  
と、彼は思い来り、更にまた彼の六号室の鉄格子の中で、ニキタが患者等を打殴っていること、モイセイカが町に行つては、施を請うている姿などを思い出す。  
それよりまた彼は医学のこの近き二十五年間において、如何に長足の進歩を為したかと云うことを考え初める。

『自分が大学にいた時分は、医学もやはり、錬金術や、形而上学などと同じ運命に至るものと思うていたが、実に驚く可き進歩である。大革命とも名けられる位だ、防腐法の発明によつて、大家のピロウゴフさえも、到底出来得べからざることを認めていた手術が、容易く遣られるようにはなつた。今では腹部截開の百度の中、死を見ることは一度位なものである。梅毒も根治される、その他遺伝論、催眠術、パステルや、コッホなどの発見、衛生学、統計学などはどうであらう……。』  
我々ロシアの地方団体の医術はどうであらうか、まず精神病に就いて云うならば、現今の病気の類別法、診断、治療の方法、共に皆これを過去の精神病と比較するならば、その差はエリボルスの山の如き高大なるものである。現今

では精神病者の治療に冷水を注がぬ、蒸暑きシャツを被せぬ、そうして人間に彼等を取扱う、即ち新聞に記載する通り、彼等の為に、演劇、舞踏を催す。

彼はまたかく思考えた。

現時の見解及び趣味を見るに、六号室の如きは、誠に見るに忍びざる、厭惡に堪えないものである。かかる病室は、鉄道を去ること、二百露里のこの小都会に於いてのみ見るのである。即ちこの市長並に町會議員は皆生物知りの町人である、であるから医師を見ることは神官の如く、その言う所を批評せずして信じている。例えば、溶解せる鉛を口に入るとも、少しも不思議には思わぬであろう。が、もしこれが他の所においてはどうか、公衆と、新聞紙とは必ずかくの如き監獄は、とうに寸断にしてしまったであろう。

『しかしそれがどうである。』

と、彼はパツと眼を開いて自ら問うた。

『防腐法だとか、コッホだとか、パステルだとか云ったって、實際においては世の中は少しもこれまでと変わらないでは無いか、病気の数も、死亡の数も、瘋癲患者の為にだとか云って、舞踏会やら、演芸会やらが催されるが、しかし彼等をして全く開放す

することは出来ないでは無いか。して見れば、何でも皆空しいことだ、ヴィンナの完全な大学病院でも、我々のこの病院と少しも差別は無いのだ。

しかし俺は有害なことに務めてると云うものだ、自分の欺いている人間から給料を食っている、不正直だ、けれども俺その者は至つて微々たるもので、社会の必然の悪の分子に過ぎぬ、総て町や、郡の官吏共でも皆詰り無用の長物だ。ただ給料を食っているに過ぎん……そうして見れば不正直の罪は、敢て自分ばかりじゃ無い、時勢にあるのだ、もう二百年も晩く自分が生れたなら、まるで別の人間であつたかも知れぬ。』

三時が鳴る、彼はランプを消して寢室に行つた。が、どうしても睡眠に就くことは出来ぬのであつた。

(八)

二年このかた、地方自治体はようよう饒になつたので、その管下に病院の設立されるまで、年々三百円ずつをこの町立病院に補助金として出すこととなり、病



院<sup>いん</sup>ではそれが為<sup>ため</sup>に医員<sup>いゐん</sup>を一人増<sup>ひとりま</sup>すことと定め<sup>さだ</sup>られた。で、アンドレイ、エヒミチの補<sup>ほ</sup>助手<sup>しゆ</sup>として、軍医<sup>ぐんゐ</sup>のエウゲニイ、フエオドロイチ、ハバトフというが、この町<sup>まち</sup>に聘<sup>へい</sup>せられた。その人<sup>ひと</sup>はまだ三十歳<sup>さい</sup>に足<sup>た</sup>らぬ若い男<sup>わかおとこ</sup>で、頬骨<sup>ほおほね</sup>の広<sup>ひろ</sup>い、眼<sup>め</sup>の小<sup>ちひ</sup>さい、ブルネト、その祖先<sup>そせん</sup>は外国<sup>がいこくじん</sup>人<sup>じん</sup>であつたかのようにも見える、彼<sup>かれ</sup>が町<sup>まち</sup>に來<sup>き</sup>た時は、錢<sup>ぜに</sup>と云<sup>い</sup>つたら一文<sup>もん</sup>もなく、小<sup>ちひ</sup>さい靴<sup>かばんだびとつ</sup>只<sup>ただ</sup>一個<sup>いっご</sup>と、下女<sup>げじよ</sup>と拘<sup>ふ</sup>れていた醜<sup>みにくい</sup>女<sup>おんな</sup>ばかりを伴<sup>ともな</sup>うて來<sup>き</sup>たので、そうしてこの女<sup>おんな</sup>には乳<sup>ちの</sup>呑<sup>のみ</sup>児<sup>みぎ</sup>があつた。彼<sup>かれ</sup>は常<sup>つね</sup>に廂<sup>ひさし</sup>の附<sup>つ</sup>いた丸帽<sup>まるぼう</sup>を被<sup>かぶ</sup>つて、深<sup>ふか</sup>い長靴<sup>ながぐつ</sup>を穿<sup>は</sup>き冬<sup>ふゆ</sup>には毛皮<sup>けがわ</sup>の外<sup>がい</sup>套<sup>とう</sup>を着<sup>き</sup>て外<sup>そと</sup>を歩<sup>ある</sup>く。病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>に來<sup>き</sup>てより間<sup>ま</sup>もなく、代診<sup>だいしん</sup>のセルゲイ、セルゲイチとも、会<sup>かい</sup>計<sup>けい</sup>とも、直<sup>す</sup>ぐに親密<sup>しんみつ</sup>になつたのである。下宿<sup>げしゆく</sup>には書物<sup>しょもつ</sup>はただ一冊<sup>さつ</sup>『千八百八十一年度<sup>ねんど</sup>ヴィンナ大学<sup>だいがく</sup>病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>最近<sup>さいきん</sup>處方<sup>しよほう</sup>』と題<sup>だい</sup>するもので、彼<sup>かれ</sup>は患者<sup>かんじや</sup>の所<sup>ところ</sup>へ行く時<sup>とき</sup>には必<sup>かなら</sup>ずそれを携<sup>たず</sup>える。晚<sup>ばん</sup>になると俱樂部<sup>くらぶ</sup>に行<sup>い</sup>つては玉突<sup>たまつき</sup>をして遊<sup>あそ</sup>ぶ、骨<sup>か</sup>牌<sup>あま</sup>は余<sup>あま</sup>り好<sup>この</sup>まぬ方<sup>ほう</sup>、そうして何時<sup>いつ</sup>も極<sup>きま</sup>りの文句<sup>もんく</sup>をよく云<sup>い</sup>う人間<sup>にんげん</sup>。

病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>には一週<sup>しゆう</sup>に二度<sup>ど</sup>ずつ通<sup>かよ</sup>つて、外來<sup>がいらい</sup>患者<sup>いかんじや</sup>を診察<sup>しんさつ</sup>したり、各病室<sup>かくびやうしつ</sup>を廻<sup>まわ</sup>つたりしていたが、防腐法<sup>ぼうふほう</sup>のここでは全<sup>ま</sup>く行<sup>な</sup>われぬこと、呼血器<sup>きゆうけつき</sup>のことなどに就<sup>つ</sup>いて、彼<sup>かれ</sup>は頗<sup>い</sup>る異議<sup>いぎ</sup>をもつていたが、それと打付<sup>うちつ</sup>けて云<sup>い</sup>うのも、院<sup>いん</sup>長<sup>ちやう</sup>に恥<sup>はじ</sup>を搔<sup>か</sup>かせるようなものと、何<sup>なん</sup>とも云<sup>い</sup>わずにはいたが、同僚<sup>どうりやう</sup>の院<sup>いん</sup>長<sup>ちやう</sup>アンドレイ、エヒミチを心<sup>こころ</sup>秘<sup>ひ</sup>

に、老込おいこみの怠惰者なまけものとして、奴やつ、金ばかり溜込ためこんでいると羨うらやんでいた。そうしてその後こに、任うにんを自分で引受ひきうけたく思おもうていた。

## (九)

三月がつすえの末かた方、消きえがてなりし雪ゆきも、次第しだいに跡あとなく融とけた或夜あるよ、病びょういん院いんの庭にわには棕むくど鳥りが切しきりに鳴ないてた折おりしも、院いんちよう長ちようどは親友しんゆうの郵便局ゆうびんきょくちよう長ちようどの立帰たちかえるのを、門もんまで見送みおくらんと室しつを出でた。丁度ちようどその時とき、庭にわに入はいつて来たのは、今いましも町まちを漁あさつて来た猶太シ人のモイセイカ、帽ぼうも被かぶらず、跣足はだしに浅い上靴あさうわぐつを突掛つつかけたまま、手てには施ほどこしの小さい袋ふくろを提さげて。

『一銭せんおくんなさい!』

と、モイセイカは寒さむさに顫ふるえながら、院いんちよう長ちようどを見て微笑びしょうする。

辞じすることの出来ぬ院いんちよう長ちようどは、隠かくしから十銭せんを出だして彼かれに遣やる。

『これはよくない』と、院いんちよう長ちようどはモイセイカの瘡やせた赤い跣足はだしの踝くるぶしを見て思おもうた。

『路みちは泥濘ぬかつていと云いうのに。』

院長いんちようは不覺そぞろに哀あわれにも、また不氣味ぶきみにも感じて、猶ジウ太人あとの後に尾ついて、その禿はげ頭あたまだの、足の蹠あしくるぶしなどを舐みしながら、別室べつしつまで行いつた。小使こつかいのニキタは相あいも変かわらず、雜具がらくたの塚つかの上に転うつていたのであるが、院長いんちようの入はいつて來たのに吃驚びっくりして跳起はねおきた。

『ニキタ、今日こんにちは。』

と、院長いんちようは柔やさしく彼かれに挨拶あいさつして。

『この猶ジウ太人あとに靴くつでも与あたえたらどうだ、そうでもせんと風邪かぜを引ひく。』

『はッ、拝承かしこまりまして御坐ござります。直すぐに會計かいけいにそう申もうしまして。』

『そうして下ください、お前は會計かいけいに私わたしがそう云いつたと云いつてくれ。』

玄關げんかんから病室びやうしつへ通かよう戸とは開ひらかれていた。イワン、デミトリチは寢台ねだいの上に横よこになつて、肘ひじを突ついて、さも心配しんぱいそうに、人声ひとこゑがするので此方こなたを見て耳みみを欽そべている。と、急きゆうに來た人ひとの院長いんちよう長ちやうだと解わかつたので、彼かれは全身ぜんしんを怒いかりに顫ふるわして、寢床ねどこから飛上とびあり、真赤まっかになつて、激怒げきどして、病室びやうしつの真中まんなかに走はしり出でて突立つつた。

『やあ、院長いんちようが來たぞ!』

イワン、デミトリチは高く※さけんで、笑わらい出だす。

『來た來た! 諸君しよくんお目出めでとう、院長閣下いんちようかつかが我々われわれを訪問ほうもんせられた! コン畜ちくし

生め！』

と、彼は声を甲走らして、地轡踏んで、同室の者等のいまだかつて見ぬ騷方。

『こん畜生！ やい毆殺してしまえ！ 殺しても足るものか、便所にでも敲打込め！』

め！』

院長のアンドレイ、エヒミチは玄関の間から病室の内を覗込んで、物柔

らかに問うのであった。

『何故ですね？』

『何故だと。』と、イワン、デミトリチは嚇すような気味で、院長の方に近寄り、顫

う手に病院服の前を合せながら。

『何故かも知れないものだ！ この盗人め！』

彼は悪々しそうに唾でも吐つ掛けるような口付きをして。

『この山師！ 人殺！』

『まあ、落着きなさい。』

と、アンドレイ、エヒミチは悪るかったと云うような顔付で云う。

『よくお聴きなさい、私はまだ何にも盗んだこともなし、貴方に何も致したことは無いの

です。貴方は何か間違ってお出なのでしょう、酷く私を怒っていないさるようだが、まあ落  
 着いて、静かに、そうして何を立腹していなさるのか、有仰ったらいいでしよう。』

『だが何の為に貴下は私をこんなところに入れて置くのです？』

『それは貴君が病人だからです。』

『はあ、病人、しかし何百人と云う狂人が自由にそこら辺を歩いているではない  
 ですか、それは貴方々の無学なるに由つて、狂人と、健康なる者との区別が出来  
 んのです。何の為に私だの、そこここにいるこの不幸な人達ばかりが恰も献祭の山羊  
 の如くに、衆の為にここに入れられていねばならんのか。貴方を初め、代診、会計、  
 それから、総てこの貴方の病院にいる奴等は、実に怪しからん、徳義上においては  
 我々共より遙に劣等だ、何の為に我々ばかりがここに入れられておつて、貴方々は  
 そうで無いのか、どこにそんな論理があります？』

『徳義上だとか、論理だとか、そんなことは何もありません。ただ場合です。即ちここ  
 に入れられた者は入っているのであるし、入れられん者は自由に歩いている、それだけ  
 のことです。私が医者で、貴方が精神病患者であると云うことにおいて、徳義も無けれ  
 ば、論理も無いのです。詰り偶然の場合のみです。』

『そんな屁理窟は解らん。』

と、イワン、デミトリチは小声で云つて、自分の寢台の上に坐り込む。

モイセイカは今日は院長のいる為に、ニキタが遠慮して何も取返さぬので、貰つて来た雑物を、自分の寢台の上に洗い浚い広げて、一つ一つ並べ初める。パンの破片、紙屑、牛の骨など、そうして寒に顫えながら、猶太語で、早言に歌うように喋り出す、大方開店でもした気取で何かを吹聴しているであらう。

『私をここから出して下さい。』と、イワン、デミトリチは声を顫わして云う。

『それは出来ません。』

『どう云う訳で。それを聞きましょう。』

『それは私の権内に無いことなのです。まあ、考えて御覧なさい、私が仮に貴方をここから出たとして、どんな利益がありますか。まず出て御覧なさい、町の者か、警察か、また貴方を捉えて連れて参りましょう。』

『左様さ左様さそれはそうだ。』と、イワン、デミトリチは額の汗を拭く、『それはそうだ、しかし私はどうしたらよからう。』

アンドレイ、エヒミチはイワン、デミトリチの顔付、眼色などを酷く気に入って、ど

うかしてこの若者を手懐けて、落着かせようと思うたので、その寢台の上に腰を下し、ちよつと考えて、さて言出す。

『貴方はどうしたらよかうと有仰るが。貴方の位置をよくするのは、ここから逃出す一方です。しかしそれは残念ながら無益に帰するので、貴方は到底捉えられずにはおらんです。社会が犯罪人や、精神病者や、総て自分等に都合の悪い人間に對して、自衛を為すのには、どうしたつて勝つことは出来ません。で、貴方の為すべき所は一つです。即ちここにいることが必要であると考えて、安心をしているのみです。』

『いや、誰にもここは必要ありません。』

『しかしすでに監獄だとか、瘋癲病院だとかの存在する以上は、誰かその中に入つていねばなりません、貴方でなければ、私、でなければ、他の者が。まあお待ちなさい、左様今に遙か遠き未来に、監獄だの、瘋癲病院の全廃された暁には、即ちこの窓の鉄格子も、この病院服も、全く無用になつてしまひましょう、無論、そう云う時は早晩来ましょう。』

イワン、デミトリチはニヤリと冷笑つた。

『そうでしょう。』と、彼は眼を細めて云うた。『貴方だの、貴方の補助者のニキタな

どのような、そう云う人間には、未来などは何の要も無い訳です。で、貴方はよい時代が来ようと済してもいられるでしょうが、いや、私の言うことは卑いかも知れませんが、笑止しければお笑い下さい。しかしです、新生活の暁は輝いて、正義が勝を制するようになれば、我々の町でも大に祭をして喜び祝いましょう。が、私はそれまでは待たれませんが、その時分にはもう死んでしまいます。誰かの子か孫かは、遂にその時代に会いましょう。私は誠心を以て彼等を祝します、彼等の為に喜びます！ 進め！ 我が同胞！ 神は君等に助を給わん！』と、イワン、デミトリチは眼を輝かして立上り、窓の方に手を伸して云うた。

『この格子の中より君等を祝福せん、正義万歳！ 正義万歳！』

『何をそんなに喜ぶのか私には訳が分りません。』と、院長はイワン、デミトリチの様子がるで芝居のようだと思ひながら、またその風が酷く気に入って云うた。

『成程、時が来れば監獄や、瘋癲病院は廃されて、正義は貴方の有仰る通り勝を占めるでしょう、しかし生活の實際がそれではありません。自然の法則は依然として元のままで、人々はやはり今日の如く病み、老い、死するのでしよう、どんな立派な生活の暁が頭われたとしても、つまり人間は棺桶に打込まれて、



穴あなの中なかに投とうじられてしまうのです。』

『では来世らいせいは。』

『何なに、来世らいせい。戯談じやうだんを云いつちやいけません。』

『貴方あなたは信じしんなさらんと見えるが私わたしは信じてます。ドストエフスキイの中うちか、ウォルテルの中うちかに、小説しょうせつ中の人物じんぶつが云いつてることがあります、もし神かみが無なかったとしたら、その時ときは人ひとが神かみを考かんがえ出だそう。で、私わたしは堅わたくしく信しんじています。もし来世らいせいが無ないとしたならば、その時ときは大いなる人にんげん間の智慧ちえなるものが、早晩そうばんこれを発明はつめいしましょう。』

『フウム、旨うまく言いった。』

と、アンドレイ、エヒミチはいと満足まんぞく気に微笑びしょうして。

『貴方あなたはそう信しんじていなさるから結構けつこうだ。そう云いう信しん仰かうがありさえすれば、たとい壁かべの中なかに塗ぬり込まれたって、歌うたを歌うたいながら生せい活かつして行ゆかれます。貴方あなたは失礼しつれいながらどこで教きょう育いくをお受うけになつたか？』

『私わたしは大学だいがくです、しかし卒業そつぎようせずに終しまいました。』

『貴方あなたは思想家しそうかで考かんがえぶか深かたい方かたです。貴方あなたのような人ひとはどんな場所ばしょにいても、自身じしんにおいて安あん心しんを求もとめることが出来できます。人じん生せいの解悟かいごに向むかつておる自由じゆうなる深ふかき思想しそうと、この

世のおろか、騒ぎたい、全然の軽蔑、これ即ち人間のこれ以上のものをいまだかつて知らぬ最大幸福です。そうして貴方はたとい三重の鉄格子の内に住んでいようが、この幸福をもっているものでありますから。ジオゲンを御覧なさい、彼は樽の中に住んでいました、けれども地上の諸王より幸福であつたのです。』

『貴方の云うジオゲンは白痴だ。』と、イワン、デミトリチは憂悶して云うた。『貴方は何だつて私に解悟だとか、何だとかと云うのです。』と、俄に怫然になつて立上つた。『私は人並の生活を好みます、実に、私はこう云う窘逐狂に罹つていて、始終苦しい恐怖に襲われていますが、或時は生活の渴望に心を燃やされるです、非常に人並の生活を望みます、非常に、それは非常に。』

彼は室内を歩き初めたが、やがて小声でまた言出す。

『私は時折種々なことを妄想しますが、往々幻想を見ます、或人が来たり、また人の声を聞いたり、音楽が聞えたり、また林や、海岸を散歩しているように思われる時もあります。どうぞ私に世の中の生活を話して下さい、何か珍しいことでも無いのですか。』

『町のことをですか、それとも一般のことに就いてですか？』

『まず町まちのことからして伺うかがいましょう。それから一般いぱんのことを。』

『町まちでは実じつにもう退屈たいくつです。誰だれを相手あいてに話はなすものもなし。話はなを聞きく者ものもなし。新あたしい人間にんげんはなし。しかしこの頃ころハバトフと云いう若い医者いしやが町まちには来きたですが。』

『どんな人間にんげんが。』

『いや、極ごくく非文明的ひぶんめいてきな、どう云いうものかこの町まちに来くるところの者は、皆みな、見るのも胸むねの悪いような人間にんげんばかり、不幸ふこうな町まちです。』

『左様さようさ、不幸ふこうな町まちです。』と、イワン、デミトリチは溜息ためいきして笑わらう。『しかし一般いぱんにはどうです、新聞しんぶんや、雑誌ざっしはどう云いうことが書かいてありますか?』

病室びやうしつの中うちはもう暗くらくなつたので、院長いんちやうは静しずかに立たちあがる。そうして立たちながら、外国がいこくや、露西亞ロシアの新聞雑誌しんぶんざっしに書かいてある珍めづらしいこと、現今げんこんはこう云いう思想しそうの潮流ちゆうりゆうが認めみとめられるとかと話はなを進すすめたが、イワン、デミトリチは頗すこぶる注意ちゆういして聞きいていた。が忽たちまち、何か恐おそしいことでも急きゆうに思おもひ出だしたかのように、彼かれは頭かしらを抱かかえるなり、院長いんちやうの方ほうへくると背せを向むけて、寢台ねだいの上に横よこになつた。

『どうかしましたか?』と、院長いんちやうは問とう。

『もう貴方あなたには一言げんだつて口くちは開ききません。』

イワン、デミトリチは素気なく云う。『私に管わんで下さい！』

『どうしたのです？』

『管わんで下さいと云ったら管わんで下さい、チョツ、誰がそんな者と口を開くものか。』  
院 長は肩を縮めて溜息をしながら出て行く、そうして玄関の間を通りながら、ニキタに向つて云うた。

『ここ辺を少し掃除したいものだな、ニキタ。酷い臭いだ。』

『拝承まりました。』と、ニキタは答える。

『何と面白い人間だろう。』と、院 長は自分の室の方へ帰りながら思うた。『ここへ来てから何年振かで、こう云う共に語られる人間に初めて出会った。議論も遣る、興味を感じずべきことに、興味をも感じている人間だ。』

彼はその後読書を為す中にも、睡眠に就いてからも、イワン、デミトリチのことが頭から去らず、翌朝眼を覚しても、昨日の智慧ある人間に遇ったことを忘れることが出来なかつた、便宜もあらばもう一度彼を是非尋ねようと思つていた。

イワン、デミトリチは昨日と同じ位置に、両手で頭を抱えて、両足を縮めたまま、横に為つていて、顔は見えぬ。

『や、御機嫌よう、今日は。』院長は六号室へ入つて云うた。『君は眠っているのですか?』

『いや私は貴方の朋友じゃ無いです。』と、イワン、デミトリチは枕の中へ顔をいよいよ埋めて云うた。『またどんなに貴方は尽力しようが駄目です、もう一言だつて私に口を開かせることは出来ません。』

『変だ。』と、アンドレイ、エヒミチは氣を揉む。『昨日我々はあんなに話したのですが、何を俄に御立腹で、絶交すると有仰るのです、何かそれとも氣に障ることも申しましたか、或は貴方の意見と合はん考を云い出したので?』

『いや、そんなら貴方に云いましょう。』と、イワン、デミトリチは身を起して、心配そうにまた冷笑的に、ドクトルを見るのであつた。『何も貴方は探偵したり、質問をしたり、ここへ来てするには当然です。どこへでも他へ行つてした方がよいです。わたしはもう昨日貴方が何の為に來たのかが解りましたぞ。』

『これは奇妙な妄想をしたものだ。』と、院長は思わず微笑する。『では貴方は私を探偵だと想像されたのですな。』

『左様。いや探偵にしろ、また私に窃に警察から廻わされた医者にしろ、どちらだつて同様です。』

『いや貴方は。困つたな、まあお聞きなさい。』と、院長は寢台の傍の腰掛に掛けて責めるがように首を振る。

『しかし仮りに貴方の云う所が真実として、私が警察から廻された者で、何か貴方の言を抑えようとしているものと仮定しましょう。で、貴方がその為に拘引されて、裁判に渡され、監獄に入れられ、或は懲役にされるとして見て、それがどうです、この六号室にいるのよりも悪いでしょうか。ここに入れられているよりも貴方に取つてどうでしょうか？ 私はこちらより悪い所は無いと思います。もしそうならば何を貴方はそんなに恐れなさるのか？』

この言にイワン、デミトリチは大に感動されたと見えて、彼は落着いて腰を掛けた。時は丁度四時過ぎ。いつもなら院長は自分の室から室へと歩いていると、ダリユシカが、麦酒は旦那様如何ですか、と問う刻限。戸外は静に晴渡った天気である。

『わたくしちゅうじきごさんぽでか  
私は中食後散歩に出掛けましたので、ちよつと立寄りしましたのです。もうまるで春で  
す。』

『いま なががつ  
今は何月です、三月でしようか？』

『さよう がつ すえ  
左様、三月も末です。』

『そと ぬか  
戸外は泥濘つておりましよう。』

『そんなでもありません、庭にはもう小径が出来ています。』

『いまごろ ばしや  
今頃は馬車にでも乗つて、郊外へ行つたらさぞいいでしょう。』と、イワン、デミ

トリチは赤い眼を擦りながら云う。『そうしてそれから家の暖い閑静な書齋に歸つて

……名医に恃つて頭痛の療治でもして貰らったら、久しい間私はもうこの人間らしい

生活をしないうが、それにしてもここは実にいやな所だ。実に堪えられんいやな所だ。』

昨日の興奮の為にか、彼は疲れて脱然して、いやいやながら言っている。彼の指は

顫えている。その顔を見ても頭が酷く痛んでいると云うのが解る。

『暖い閑静な書齋と、この病室との間に、何の差も無いのです。』と、アンドレ

イ、エヒミチは云うた。『人間の安心と、満足とは身外に在るのではなく、自身

の中に在るのです。』

『どう云う訳で。』

『通常つうじょうの人間にんげんは、いいことも、悪いことも皆みな身外しんがいから求めます。即ち馬車すなわばしゃだとか、書齋しよさいだとかと、しかし思想家しそうかは自身じしんに求めるのです。』

『貴方あなたはそんな哲学てつがくは、暖あたな杏あんの花はなの香かのする希臘ギリシャに行いつてお伝つたえなさい、ここではそんな哲学てつがくは氣候きこうに合あいません。いやそうと、私は誰たれかとジオゲンの話はなしをしましたつけ、貴方あなたとでしたろうか？』

『左様昨日私さようきのわたしと。』

『ジオゲンは勿論書齋しよさいだとか、暖い住居あたたかすまいだとかには頓とん着じゃくしませんでした。これは彼の地かちが暖あたいからです。樽たるの中に寐ね転ころがつて蜜柑みかんや、橄欖かんらんを食たべていればそれで過すごされる。しかし彼かれをして露西亞ロシアに住すまわしめたならば、彼かれ必ず十二月所がごころではない、三月がつの陽氣ようきに成なつても、室へやの内に籠うちこもつていたがるでしょう。寒氣かんきの為ために体からだも何も屈曲まがつてしまふでしょう。』

『いや寒氣かんきだとか、疼痛とうつうだとかは感かんじないことが出来できるです。マルク、アウレリイが云いつたことがありましよう。「疼痛とうつうとは疼痛とうつうの活いきた思想しそうである、この思想しそうを變へんぜしむるが為ためには意旨いしの力ちからを奮ふるい、しかしてこれを棄すてて以もつて、訴うつたことを止やめよ、しからば



疼痛は消滅すべし。」と、これはよく言つた語です、智者、哲人、もしくは思想家たるものの、他人に異なる所の点は、即ちここに在るのでしよう、苦痛を軽んずると云うことに。ここにおいてか彼等は常に満足で、何事にもまた驚かぬのです。』

『では私などは徒に苦み、不満を鳴し、人間の卑劣に驚いたりばかりしていますから、白痴だと有仰るのでしよう。』

『そうじや無いです。貴方もいよいよ深く考慮するように成つたならば、我々の心を動す所の、総ての身外の些細なることは苦にもならぬとお解りになる時がありましよう、人は解悟に向わなければなりません。これが真実の幸福です。』

『解悟……。』イワン、デミトリチは顔を顰める。『外部だとか、内部だとか……。いや私にはそう云うことは少しも解らんです。私の知つてゐることはただこれだけです。』と、彼は立上り、怒つた眼で院長を睨み付ける。『私の知つてゐるのは、神が人を熱血と、神経とより造つたと云うことだけです！ また有機的組織は、もしそれが生活力をもつてゐるとすれば、総ての刺戟に反応を起すべきものである。それで私は反応しています。即疼痛に対しては、絶※と、涙とを以て答え、虚偽に対しては憤懣を以て、陋劣に対しては厭惡の情を以て答えてゐるです。私の考ではこれがそもそ

も生活と名づくべきものだろうと。また有機体が下等に成れば成るだけ、より少く物を感じるのであらうと、それ故により弱く刺戟に答えるのである。で、高等に成れば随てより強き勢力を以て、實際に反応するのです。貴方は医者でおいでで、どうしてこんな訳がお解りにならないです。苦を輕んずるとか、何にでも満足しているとか、どんなことにも驚かんと云うようになるのには、あれです、ああ云う状態になってしまわなければ。』と、イワン、デミトリチは隣の油切った彼の動物を差してそう云うた。『或はまた苦痛を以て自分を鍛練して、それに対しての感覚をまるで失ってしまう、言を換えて言えば、生活を止めてしまうようなことに至らしめなければならぬのです。私は無論哲人でも、哲学者でも無いのですから。』と、更に激して。『ですから、こんなことに就いては何にも解らんのです。議論する力が無いのです。』

『どうしてなかなか、貴方は立派に議論なさるです。』  
『貴方が例証に引きなすつたストア派の哲学者等は立派な人達です。しかしながら彼等の学説はすでに二千年以前に廃れてしまいました、もう一歩も進まんのです、これから先、また進歩することは無い。如何となればこれは現実的でない、活動的で無いからである。こう云う学説は、ただ種々の学説を集めて研究したり、比較し

たりして、これを自分の生涯の目的としている、極めて少数の人ばかりに行われて、他の多数の者はそれを了解しなかったのです。苦痛を輕蔑すると云うことは、多数の人に取つたならば、即ち生活その物を輕蔑すると云うことになる。如何となれば、人間全体は、餓だとか、寒だとか、凌辱めだとか、損失だとか、死に對するハムレット的の恐怖などの感覺から成立つていゝのです。この感覺の中において人生全体が含まれていゝのです。これを苦にすること、惡むことは出来ず。が、これを輕蔑することは出来ず。であるから、ストア派の哲學者は未來をもつことが出来るのです。御覽なさい、世界の始から、今日に至るまで、ますます進歩して行くものは生存競争、疼痛の感覺、刺戟に對する反應の力などでしょう。』と、イワン、デミトリチは俄に思想の連絡を失つて、残念そうに額を擦つた。

『何か肝心なことを云おうと思つて出なくなつた。』

と、彼は続ける。『それじや基督でも例に引きましよう、基督は泣いたり、微笑したり、悲んだり、怒つたり、憂に沈んだりして、現實に對して反應していたのです。彼は微笑を以て苦に對わなかつた、死を輕蔑しませんでした、却つて「この杯を我より去らしめよ」と云うて、ゲフシマニヤの園で祈禱しました。』

イワン、デミトリチはかく云つて笑出しながら坐る。

『で仮りに人間の満足と安心とが、その身外に在るに非らずして、自身の内に在るとして、また仮りに苦痛を輕蔑して、何事にも驚かぬようにしなければならぬとして、見て、第一貴方自身は何に基いて、こんなことを主張なさるのか、貴方は一体哲人ですか、哲学者ですか？』

『いや私は哲学者でも何でも無い。が、これを主張するのは、大に各人の義務だろふと思うのです、これは道理のあることで。』

『いや私の知ろふと思うのは、何の爲に貴方が解悟だの、苦痛だの、それに対する輕蔑だの、その他のことに就いて自ら精通家と認めてお出なのですか。貴方は何時にか苦んだことでもあるのですか、苦しみと云ふことの理解をもつてお出ですか、或は失礼ながら貴方はお幼少時分、打擲でもなされましたことがおありなのですか？』

『否、私の両親は、身体上の処刑は非常に嫌つていたのです。』

『私は父には酷く仕置をされました。私の父は極く苛酷な官員であつたのです。が、貴方のことを申して見ましようかな。貴方は一生涯誰にも苛責されたことは無く、健康なること牛の如く、嚴父の保護の下に生長し、それで學問させられ、それから

して割のよい役に取付き、二十年以上の間も、暖炉も焚いてあり、灯も明るき無料の  
 官宅に、奴婢をさえ使つて住んで、その上、仕事は自分の思うまま、してもしなくても  
 済んでいると云う位置。で、生来貴方は怠惰者で、嚴格で無い人間、それ故貴方  
 は何んでも自分に面倒でないよう、働かなくとも済むようとばかり心掛けている、事  
 業は代診や、その他のやくざものに任せ切り、そうして自分は暖い静な処に坐して、  
 金を溜め、書物を読み、種々な屁理窟を考え、また酒を（彼は院長の赤い鼻を見て）  
 呑んだりして、楽隠居のような真似をしている。一言で云えば、貴方は生活と云うも  
 のを見ないのです、それを全く知らんのです。そうして實際と云うことをただ理論の上  
 からばかり推している。だから苦痛を軽蔑したり、何事にも驚かんなどと云つていら  
 れる。それは甚だ単純な原因に由るのです。「空の空」だとか、内部だとか、外部  
 だとか、苦痛や、死に対する軽蔑だとか、真正なる幸福だとか、とこんな言草は、  
 皆ロシヤの怠惰者に適当している哲学です。で、貴方はこうなのだ、まず齒が痛む  
 と云う農婦が来る……と、それがどうしたのだ。疼痛は疼痛のこの思想である。か  
 つまた、病気が無くてはこの世に生きて行く訳には行かぬものだ。早く帰るべし。俺の  
 思想とヴォツカを呑む邪魔をするな。とこう云うでしょう。また或若者が来てどう云う

ふう 風に生活をしたらいいかと相談を掛けられる、と、他人はまず一番考える所であろうが、貴方にはその答はもうちやんと出来ている。解悟に向いなさい、真正の幸福に向いなさい。とこう云うです。我々をこんな格子の内に監禁して置いて苦しめて、そうしてこれは立派なことだ、理窟のあることだ、いかんとなればこの病室と、暖なる書齋との間に何の差別もない。と、誠に都合のいい哲学です。そうして自分を哲人と感じてゐる……いや貴方これはです、哲学でもなければ、思想でもなし、見解の敢て広いのでも無い、怠惰です。自滅です。睡魔です！ 左様！」と、イワン、デミトリチは昂然として『貴方は苦痛を軽蔑なさるが、試に貴方の指一本でも戸に挟んで御覧なさい、そうしたら声限り※ぶでしよう。』

『或は※ばんかも知れません。』と、アンドレイ、エヒミチは言う。

『そんなことは無い、例えば御覧なさい、貴方が中風にでも罹ったとか、或は仮に愚者が自分の位置を利用して貴方を公然辱しめて置いて、それが後に何の報も無しに済んでしまったのを知ったならば、その時貴方は他の人に、解悟に向いなさいとか、真正の幸福に向いなさいとか云うことの効力が果して、何程と云うことが解りましよう。』

『これは奇抜だ。』と院長は満足の余り微笑しながら、両手を擦り擦り云う。

『わたくしあなたすべ  
私は貴方が総てを綜合する傾向をもっているのを、面白く感じかつ敬服致した  
のです、また貴方が今述べられた私の人物評は、ただ感心する外はありません。実  
は私は貴方との談話において、この上も無い満足を得ましたのです。で、私は貴方のお  
話はなしのこらずうかが  
話を不残伺いましたから、こんどはどうぞ私の話をもお聞き下さい。』

## (十一)

かくて後、なお二人の話は一時間も続いたが、それより院長は深く感動して、毎  
日、毎晩のように六号室に行くのであった。二人は話込んでいる中に日も暮れて  
しまうことがままある位、イワン、デミトリチは初めの中は院長が野心でもあるので  
は無いかと疑って、彼にとかく遠ざかって、不愛想にしていたが、段々慣れて、遂に  
は全く素振を変えたのであった。

しかるに病院の中では院長アンドレイ、エヒミチが六号室に切に通い出した  
のを怪んで、その評判が高くなり、代診も、看護婦も、一様に何の為に行くのか、  
何で数時間余もあんな処にいるのか、どんな話をするのであろうか、彼処へ行っても処

方書うがきを示しめさぬでは無いかと、彼方あつちでも、此方こつちでも、彼が近頃ちかごろの奇きなる挙動きようどうの評判ひようばんで持切もちきつてゐる始末しまつ。ミハイル、アウエリヤヌイチはこの頃ごろでは始終彼の留守るすにばかり行く。ダリユシカは旦那だんなが近頃ちかごろは定刻ていこくに麦酒ビールを吞のまず、中食ちゆうじきまでも晩おくれることが度々たびたびなので困却こまつてゐる。

或時あるとき六月がつの末すえ、ドクトル、ハバトフは、院長いんちように用事ようじがあつて、その室へやに行つた所ところ、おらぬので庭にわへと探さがしに出た。するとそこで院長いんちようは六号室ごうしつであると聞きき、庭にわから直すぐに別室べつしつに入り、玄関げんかんの間に立留たちどまると、丁度ちやうどこう云う話はなしが聞えたので。『我々われわれは到底とうてい合奏がっそうは出来できません、私を貴方あなたの信仰しんこうに帰きせしむる訳わけには行きませんから。』

と、イワン、デミトリチの声こゑ。

『現実げんじつと云うことは全く貴方あなたには解わからんのです、貴方あなたはいまだかつて苦くるんだことは無いのですから。しかし私は生なれたその日ひより今日こんにちまで、絶えず苦痛くつうを嘗なめてゐるのです、それ故私わたしは自分を貴方あなたよりも高いもの、万事ばんじにおいて、より多く精通せいつうしてゐるものと認みとめておるです。ですから貴方あなたが私わたしに教おしえると云う場合ばあいで無いのです。』

『私わたしは何も貴方あなたを自分の信仰しんこうに向むかわせようと云う権利けんりを主張しゆちやうはせんのです。』院長いんち



長は自分を解つてくれ人の無いので、さも残念と云うように。『そう云う訳では無い  
 のです、それは貴方が苦痛を嘗めて、私が嘗めないということではないのです。詮ずる所、  
 苦痛も快樂も移り行くもので、そんなことはどうでもいいのです。で、私が言おうと思  
 うのは、貴方と私とが思想するもの、相共に思想したり、議論をしたりする力があるも  
 のと認めているということです。たとい我々の意見が何の位違つても、ここに我々の  
 一致する所があるのです。貴方がもし私が一般の無智や、無能や、愚鈍を何れ程に厭うて  
 おるかを知つて下すつたならば、また如何なる喜を以て、こうして貴方と話をしているか  
 と云うことを知つて下すつたならば！ 貴方は知識のある人です。』  
 ハバトフはこの時少ばかり戸を開けて室内を覗いた。イワン、デミトリチは頭巾を被  
 つて、妙な眼付をしたり、顫上つたり、神経的に病院服の前を合わしたりしている。  
 院長はその側に腰を掛けて、頭を垂れて、じつとして心細いような、悲しいよう  
 な様子で顔を赤くしている。ハバトフは肩を縮めて冷笑し、ニキタと見合う。ニキタも同  
 じく肩を縮める。

翌日ハバトフは代診を伴れて別室に来て、玄関の間でまたも立聞。  
 『院長殿、とうとう発狂と御坐つたわい。』と、ハバトフは別室を出ながらの

話。<sup>はなし</sup>

『主憐よ、主憐よ、主憐よ！』と、敬虔なるセルゲイ、セルゲイチは云いながら。ピカピカと磨上げた靴を汚すまいと、庭の水溜を避け避け溜息をする。

『打明けて申しますとな、エウゲニイ、フエオドロイチもう私は疾うからこんなことになりはせんかと思つていましたのさ。』

## (十二)

その後院長アンドレイ、エヒミチは自分の周囲の者の様子の、ガラリと變つたことを漸く認めた。小使、看護婦、患者等は、彼に往遇う度に、何をか問うものの如き眼付で見る、行き過ぎてからは私語く。折々庭で遇う会計係の小娘の、彼が愛していた所のマアシャは、この節は彼が微笑して頭でも撫でようとする、急いで遁出す。郵便局長のミハイル、アウエリヤヌイチは、彼の所に来て、彼の話を聞いてはいるが、先のようにそれは真実ですとはもう云わぬ。何となく心配そうな顔で、左様々々、左様、と、打湿つて云つてゐるかと思つたと、やれヴォツカを止せの、麦酒を止めろのと勧め

初める。また医員のハバトフも時々来ては、何故かアルコール分子の入っている飲物を止せ。ブローミウム加里を服めと勧めて行くので。

八月にアンドレイ、エヒミチは市役所から、少し相談があるに由つて、出頭を願うと云う招状があつた、で、定刻に市役所に行つて見ると、もう地方軍令部長を初め、郡立学校視学官市役所員、それにドクトル、ハバトフ、またも一人の見知らぬブロンジンの男、ずらりと並んで控えている。傍にいた者は直ぐに院長にこの人間を紹介した、やはりドクトルで、何だとかと云うポーランドの云い悪い名の町から三十ヴェルスタばかり隔つてゐる、或る育馬所にゐる者、今日この町を何かの用でちよつと通掛つたので、この場所へ立寄つたとのことで。

『ええ只今、足下に御関係のある事柄で、申上げたいと思うのですが。』と、市役所員は居並ぶ人々の挨拶が済むとこう切り出した。『あ、エウゲニイ、フェオドロイチの有仰るには、本院の薬局が狭隘なので、これを別室の一つに移転してはどうかと云うのです。勿論これは雑作も無いことですが、それには別室の修繕を要すると云うそのことです。』

『左様、修繕を致さなければならぬでしょう。』と、院長は考えながら云う。

『例えば隅の別室を薬局に当てようと云うには、私の考では、極く少額に見積つても五百円は入りましよう、しかし余り不生産的な費用です。』

皆はすこし黙っている。院長は静にまた続ける。

『私はもう十年も前から、そう申上げていたのですが、全体この病院の設立られたのは、四十年代の頃でしたが、その時分は今日のような資力では無かったもので、しかし今日の所では病院は、確かに市の資力以上の贅沢に為っているので、余計な建物、余計な役などで随分費用も多く費っているのです。私の思うには、これだけの錢を費うのなら、遣り方をさえ換えれば、ここに二つの模範的の病院を維持することが出来ると思います。』

『では一つ遣り方を換えて御覧になつたら如何です。』

と、市役所員は活発に云う。

『私は前にも申上しました通り、医学上の事務を地方自治体の方へ、お渡しになつてはどうでしょう?』

『地方自治に錢を渡したら、それこそ彼等は皆盗んでしまひましよう。』と、ブロンジンのドクトルは笑い出す。

『そりや極つてます。』と、市役所員も同意して笑う。

院長は茫然とブロンジンのドクトルを見たが、『しかし公平に考えなければならいませぬ。』と云うた。

皆はまたしばし黙してしまふ。その中に茶が出る。ドクトル、ハバトフは皆との一般の話の中も、院長の言に注意をして聞いていたが突然に、『アンドレイ、エヒミチ今日は何日です?』それから続いて、ハバトフとブロンジンのドクトルとは下手なのを感じている試験官と云つたような調子で、今日は何曜日だとか、一年の中には何日あるとか、六号室には面白い予言者がいるそうなどかと、交々尋問ねるのであつた。

院長は終の間には赤面して、『いや、あれは病人です、しかし面白い若者で。』と答えた。

もう誰も何とも質問をせぬのである。

院長は玄関の間で外套を着、市役所の門を出たが、これは自分の才能を試験する所の委員会であつたと初めて悟り、自分に懸けられた質問を思い出し、一人自ら赤面し、一生の中今初めて、医学なるものを、つくづくと情無い者に感じたのであ

る。

その晩、郵便局長のミハイル、アウエリヤヌイチは彼の所に來たが、挨拶もせずにいきなり彼の両手を握つて、声を顫わして云うた。

『おお君、ねえ、君は僕の切なる意中を信じて、僕を親友と認めてくれることを証して下さるでしようね……え、君！』

彼は院長の云わんとするのを遮つて、何かそわそわして続けて云う。『私は貴方の

教育と、高尚なる心とを甚だ敬愛しておるです。どうぞ君、私の云うことを聞

いて下さい。医学の原則は、医者等をして貴方に実を云わしめたのです。しかしながら

私は軍人風に真向に切出します。貴方に打明けて云います、即ち貴方は病氣なので

す。これはもう周囲の者の疾うより認めている所で、只今もドクトル、エウゲニイ、フ

エオドロイチが云うのには、貴方の健康の爲には、須く気晴をして、保養を専一とせ

なければならんと。これは實際です。所が、丁度私もこの節、暇を貰つて、異つた空

気を吸いに出掛けようと思つてゐる矢先、どうでしょう、一所に付合つては下さらんか、

そうして旧事を皆忘れてしまひましょうじやありませんか。』

『しかし私は少しも身体に異状は無いです、壮健です。無暗に出掛けることは出来ま

せん、どうぞ私の友情を他のことで何とか証させて下さい。』

アンドレイ、エヒミチは初の一分時は、何の意味もなく書物と離れ、ダリユシカと麦酒とに別れて、二十年來定まったその生活の順序を破ると云うことは出来なく思ふたが、また深く思えば、市役所でありしこと、その自ら感じた不愉快のこと、愚な人々が自分を狂人視しているこんな町から、少しでも出て見たらば、とも思うのであった。

『しかし貴方は一体どこへお出掛けになろうと云うのです？』 院長は問うた。

『モスクワへも、ペテルブルグへも、ワルシャワへも……ワルシャワは実によい所です、私が幸福の五年間は彼処で送つたのでした、それはいい町です、是非行きましょう、ねえ君。』

### (十三)

一週間を経てアンドレイ、エヒミチは、病院から辞職の勧告を受けたが、彼はそれに対しては至つて平氣であつた。かくてまた一週間を過ぎ、遂にミハイル、

アウエリヤヌイチと共に郵便の旅馬車に打乗り、近き鉄道のステーションを差して、旅行にと出掛けたのである。

空は爽に晴れて、遠く木立の空に接する辺も見渡される涼しい日和。ステーションまでの

の二百ヴェルスタの道を二昼夜で過ぎたが、その間馬の継場々々で、ミハイル、アウエ

リヤヌイチは、やれ、茶の杯の洗いがどうだとか、馬を附けるのに手間が取れるとか

と力んで、上旬には、何も黙れとか、彼れこれ云うな、とかと真赤になって騒を返す。道

々も一分の絶間もなく喋り続けて、カフカズ、ポーランドを旅行したことなどを話す。

そうして大声で眼を剥出し、夢中になつてドクトルの顔へはふツはふツと息を吐掛け

る、耳許で高笑する。ドクトルはそれが為に考に耽ることもならず、思に沈むこと

も出来ぬ。

汽車は経済の為に三等で、喫煙をせぬ客車で行った。車室の中はさのみ不潔の

人間ばかりではなかつたが、ミハイル、アウエリヤヌイチは直に人々と懇意になつて

誰にでも話を仕掛け、腰掛から腰掛へ廻り歩いて、大声で、こんな不都合極る汽車

は無いとか、皆盗人のような奴等ばかりだとか、乗馬で行けば一日に百ヴェルスタも

飛ばせて、その上愉快に感じられるとか、我々の地方の不作なのはピン沼などを枯して



しまつたからだ、非常な乱暴をしたものだとか、などと云つて、殆ど他には口も開かせぬ、そうしてその相間には高笑と、仰山な身振。

『私等二人の中、何れが癡癡者だろうか。』と、ドクトルは腹立しくなつて思つた。『少しも乗客を煩わさんように務めてゐる俺か、それともこんなに一人で大騒をしてゐた、誰にも休息もさせぬこの利己主義男か?』

モスクワへ行つてから、ミハイル、アウエリヤヌイチは肩章の無い軍服に、赤線の入つたズボンを書いて町を歩くにも、軍帽を被り、軍人の外套を着た。兵卒は彼を見て敬礼をする。アンドレイ、エヒミチは今初めて気が着いたが、ミハイル、

アウエリヤヌイチは前に大地主であつた時の、余り感心せぬ風ばかりが今も残つてゐると云うことを。机の前にマツチはあつて、彼はそれを見ていながら、その癖、大声を上げて小使を呼んでマツチを持つて来いなどと云い、女中のいる前でも平気で下着一つで歩いてゐる、下僕や、小使を捉えては、年を寄つたものでも何でも構わず、貴様々々と頭碎。その上に腹を立つと直ぐに、この野郎、この大馬鹿と悪体が始まるので、これらは大地主の癖であるが、余り感心した風では無い、とドクトルも思つたのであつた。

モスクワ見物の第一着に、ミハイル、アウエリヤヌイチはその友をまずイウエルスカヤ小聖堂に伴れ行き、そこで彼は熱心に伏拝して涙を流して祈禱する、そうして立上り、深く溜息して云うには。

『たとい信じなくとも、祈禱をすると、何とも云われん位、心が安まる、君、接吻し給え。』

アンドレイ、エヒミチは体裁悪く思いながら、聖像に接吻した。ミハイル、アウエリヤヌイチは唇を突出して、頭を振りながら、またも小声で祈禱して涙を流している。それから二人はそこを出て、クレムリに行き、大砲王（巨大な砲）と大鐘王（巨大な鐘、モスクワの二大名物）とを見物し、指で触つて見たりした。それよりモスクワ川の向の町の景色などを見渡しながら、救世主の聖堂や、ルミヤンツセフの美術館なんどを廻つて見た。

中食はテストフ亭と云う料理店に入つたが、ここでもミハイル、アウエリヤヌイチは、頬鬚を撫でながら、ややしばらく、品書を拈転つて、料理店を我が家のように挙動う愛食家風の調子で。

『今日はどんな御馳走で我々を食わしてくれるか。』と、無暗と幅を利かせたがる。

## (十四)

ドクトルは見物もし、歩いても見、食つても飲んでも見たのであるが、ただもう毎  
 日ミハイル、アウエリヤヌイチの挙動に弱られ、それが鼻に着いて、嫌で、嫌でな  
 らぬので、どうかして一日でも、一時でも、彼から離れて見たく思うのであつたが、友は  
 自分より彼を一步でも離すことはなく、何でも彼の気晴をするが義務と、見物に出ぬ  
 時は饒舌り続けて慰めようと、附纏い通しの有様。二日と云うものアンドレイ、エヒ  
 ミチは堪え堪えて、我慢をしていたのであるが、三日目にはもうどうにも堪え切れず。少  
 し身体の工合が悪いから、今日だけ宿に残っていると、遂に思切つて友に云うたのであ  
 った、しかるにミハイル、アウエリヤヌイチは、それじや自分も家にいることにしよう、  
 少しは休息もしなければ足も続かぬからと云う挨拶。アンドレイ、エヒミチはうんざり  
 して、長椅子の上に横になり、倚掛の方へ突と顔を向けたまま、齒を切つて、友の喋  
 喋語るのを詮方なく聞いている。さりとて知らぬミハイル、アウエリヤヌイチは、大  
 得意で、仏蘭西は早晩独逸を破つてしまふだろうとか、モスクワには攫客が多いとか、

馬は見掛ばかりでは、その真価は解らぬものであるとか。と、それからそれへと話を續けて息の継ぐ暇も無い、ドクトルは耳をガンとして、心臓の鼓動さえ烈しくなつて来る。と云つて、出て行つてくれ、黙つていてくれとは彼には言われぬので、じつと辛抱してゐる辛さは一倍である。所が仕合にもミハイル、アウエリヤヌイチの方が、こんどは宿に引込んでゐるのが、とうとう退屈になつて来て、中食後には散歩にと出掛けて行つた。

アンドレイ、エヒミチはやつと一人になつて、長椅子の上ののろのろと落着いて横になる。室内に自分ただ一人、と意識するのは如何に愉快であつたらう。眞実の幸福は実に一人でなければ得べからざるものであると、つくづく思うた。そうして彼は此頃見た、聞いたりしたことを考えようと思つたが、どうしたものかやはり、ミハイル、アウエリヤヌイチが頭から離れぬのであつた。

その後は彼は少しも外出せず、宿にばかり引込んでいた。友はわざわざ休暇を取つて、かく自分と共に出発したのでは無いか。深き友情によつてでは無いか、親切なのでは無いか。しかし実にこれ程有難迷惑のことがまたとあらうか。降参だ、眞平だ。とは云え、彼に悪意があるのでは無い。と、ド

クトルは更にまたしみじみと思うたのであった。

ペテルブルグに行つてからもドクトルはやはり同様、宿にのみ引籠つて外へは出ず、一日長椅子の上に横になり、麦酒を呑む時にだけ起る。

ミハイル、アウエリヤヌイチは、始終ワルシヤワへ早く行くつとばかり云うている。

『しかし君、私は何もワルシヤワへ行く必要は無いのだから、君一人で行き給え、そうして私をどうぞ先に故郷に帰して下さい。』アンドレイ、エヒミチは哀願するように云うた。

『飛だことさ。』と、ミハイル、アウエリヤヌイチは聴入れぬ。『ワルシヤワこそ君に見せにやならん、僕が五年の幸福な生涯を送つた所だ。』

アンドレイ、エヒミチは例の氣質で、それでもとは云い兼ね、遂にまた嫌々ながらワルシヤワにも行つた。そこでも彼は宿から出ずに、終日相変らず長椅子の上に転がり、相変らず友の挙動に愛想を尽かしている。ミハイル、アウエリヤヌイチは一人して元氣よく、朝から晩まで町を遊び歩き、旧友を尋ね廻り、宿には数度も帰らぬ夜があつた位と、或朝早く非常に興奮した様子で、真赤な顔をし、髪も茫々として宿に帰つて来た。そうして何か独語しながら、室内を隅から隅へと急いで歩く。

『名誉は大事だ。』

『そうだ名誉が大切だ。全体こんな町に足を踏込んだのが間違いだった。』と、彼は更にドクトルに向つて云うた。『実は私は負けたのです。で、どうでしょう、金を五百円貸しては下さらんか?』

アンドレイ、エヒミチは金を勘定して、五百円を無言で友に渡したのである。ミハイル、アウエリヤヌイチはまだ真赤になつて、面目無いような、怒つたような風で。

『きつと返却します、きつと。』などと誓いながら、また帽を取るなり出て行つた。が、おおよそ大略二時間を経つてから歸つて来た。

『お蔭で名誉は助かつた。もう出発しましう。こんな不徳義極る所に一分だつて留つていられるものか。掏摸ども奴、墮探ども奴。』

二人が旅行を終えて歸つて来たのは十一月、町にはもう深雪が真白に積つていた。

アンドレイ、エヒミチは歸つて見れば自分の位置は今ドクトル、ハバトフの手に渡つて、病院の官宅を早く明渡すのをハバトフは待つているというとのこと、またその下女と名づけていた醜婦は、この間から、別室の内の或る処に移転した。町には、病院の新院長に就いての種々な噂が立てられていた。下女と云う醜婦が會計と

喧嘩けんかをしたとか、会計かいけいはその女おんなのまえに膝ひざを折おつて謝罪しやざいしたとか、と。

アンドレイ、エヒミチは帰来かえり早々そうそうまずその住居すまいを尋ねたずねばならぬ。

『不遠慮ぶえんりよな御質問おたずねですがなあ君きみ。』と郵便局ゆうびんきょく局長きやうはアンドレイ、エヒミチに向むかつて云いうた。

『貴方あなたは何位どのくらい財産ざいさんをお所有もちですか？』

問とわれて、アンドレイ、エヒミチは黙もくしたまま、財囊さいふの銭ぜにを数かずえ見みて。『八十六円えん。』

『否いえ、そうじゃないのです。』ミハイル、アウエリヤヌイチは更に云さら直いいなす。『その、君きみの財産ざいさんは総計そうけいで何位どのくらいと云いうのを伺うかうのさ。』

『だから総計そうけい八十六円えんと申もうしているのです。それ切り私わたしは一文もんも所有もつちやおらんのので。』

ミハイル、アウエリヤヌイチはドクトルの廉潔れんけつで、正直しょうじきであるのは予かねても知しつていたが、しかしそれにしても、二万円位えんらいは確たしかにも所有もつていることとのみ思おもうていたのに、かくと聞きいては、ドクトルがまるで乞食こじきにも等ひとしき境遇きやうぐうと、思おもわず涙なみだを落おして、ドクトルを抱いだき締しめ、声こえを上げあげて泣なくのであつた。

## (十五)

ドクトル、アンドレイ、エヒミチはベローワと云う婦の小汚ない家の一間を借りることになった。彼は前のように八時に起きて、茶の後は直に書物を楽しんで読んでいたが、この頃は新しい書物も買えぬので、古本ばかり読んでいる為か、以前程には興味を感じぬ。或時徒然なるに任せて、書物の明細な目録を編成し、書物の背に札を一つ貼付けたが、こんな機械的な単調な仕事で、却つて何故か奇妙に彼の思想を弄して、興味をさえ添えしめていた。

彼はその後病院に二度イワン、デミトリチを尋ねたのであるがイワン、デミトリチは二度ながら非常に興奮して、激昂していた様子で、饒舌することはもう飽きたと云つて彼を拒絶する。彼は詮方なくお眠みなさい、とか、左様なら、とか云つて出て来ようとするれば、『勝手にしやがれ。』と怒鳴り付ける権幕。ドクトルもそれから行くのを見合わせてはいるものの、やはり行きたく思っていた。

前には彼は中食後は、きつと室の隅から隅へと歩いて考えに沈んでいるのが常であったが、この頃は中食から晩の茶の時までは、長椅子の上に横になる。と、いつも妙な



一つ思想が胸に浮ぶ。それは自分が二十年以上も勤務をしていたのに、それに対して養  
 老金も、一時金もくれぬことで、彼はそれを思うと残念であった。勿論余り正  
 直には務めなかつたが、年金など云うものは、たとい、正直であらうが、無かろ  
 うが、凡て務めた者は受けべきである。勲章だとか、養老金だとか云うものは、徳  
 義上の資格や、才能などに報酬されるのではなく、一般に勤務その物に対して報  
 酬されるのである。しからば何で自分ばかり報酬をされぬのであらう。また今  
 更考えれば旅行に由りて、無惨々々と惜ら千円を費い棄てたのはいかにも残念。酒  
 店には麦酒の払が三十二円も滞る、家賃とてもその通り、ダリユシカは密に古服やら、  
 書物などを売っている。此際彼の千円でもあつたなら、どんなに役に立つことかと。  
 彼はまたかかる位置になつてからも、人が自分を抛棄つては置いてくれぬのが、却  
 て迷惑で残念であつた。ハバトフは折々病気の同僚を訪問するのは、自分  
 の義務であるかのように、彼の所に蒼蠅く来る。彼はハバトフが嫌でならぬ。その満足  
 な顔、人を見下るような様子、彼を呼んで同僚と云う言、深い長靴、此等は皆気障  
 でならなかつたが、殊に癩に障るのは、彼を治療することを自分の務として、真面目に  
 治療をしている意なの。で、ハバトフは訪問をする度に、きつとブローミウム加里

の<sup>はい</sup>入<sup>びん</sup>った<sup>だいおう</sup>壇<sup>がんやく</sup>と、大<sup>も</sup>黄<sup>く</sup>の丸<sup>く</sup>藥<sup>く</sup>とを持<sup>も</sup>つて来<sup>く</sup>る。

ミハイル、アウエリヤヌイチもやはり、しよつちゆう、アンドレイ、エヒミチを訪問<sup>たず</sup>ねて来<sup>き</sup>て、氣<sup>き</sup>晴<sup>ばらし</sup>をさせることが自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の義<sup>ぎ</sup>務<sup>む</sup>と心<sup>こころ</sup>得<sup>え</sup>ている。で、来<sup>く</sup>ると、ま<sup>そ</sup>るで空<sup>そら</sup>々<sup>ざら</sup>しい無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>な元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>を出<sup>だ</sup>して、強<sup>し</sup>いて高<sup>たか</sup>笑<sup>わらい</sup>をして見<sup>み</sup>たり、今<sup>き</sup>日<sup>よう</sup>は非<sup>ひ</sup>常<sup>じょう</sup>に顔<sup>か</sup>色<sup>いろ</sup>がいか、何<sup>なん</sup>とか、ワルシヤワの借<sup>しゃ</sup>金<sup>きん</sup>を払<sup>は</sup>わぬので、内<sup>ない</sup>心<sup>しん</sup>の苦<sup>くる</sup>しくあるのと、恥<sup>はず</sup>しくある所<sup>ところ</sup>から、余<sup>よ</sup>計<sup>けい</sup>に強<sup>し</sup>いて氣<sup>き</sup>を張<sup>は</sup>つて、大<sup>おお</sup>声<sup>こゑ</sup>で笑<sup>わら</sup>い、高<sup>たか</sup>調<sup>ちよう</sup>子<sup>し</sup>で饒<sup>しゃ</sup>舌<sup>べ</sup>るのであるが、彼<sup>かれ</sup>の<sup>はなし</sup>話<sup>はなし</sup>にはもう倦<sup>うん</sup>厭<sup>ざ</sup>りしているア<sup>あ</sup>ンド<sup>ん</sup>レ<sup>い</sup>、エ<sup>え</sup>ヒミ<sup>ち</sup>は、聞<sup>き</sup>くのもなかなかに大<sup>たい</sup>儀<sup>ぎ</sup>で、彼<sup>かれ</sup>が来<sup>く</sup>ると何<sup>い</sup>時<sup>つ</sup>もくると顔<sup>か</sup>を壁<sup>かべ</sup>に向<sup>む</sup>けて、長<sup>なが</sup>椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>の上<sup>うえ</sup>に横<sup>よこ</sup>になつた切<sup>き</sup>り、そうして齒<sup>は</sup>を切<sup>い</sup>つてい<sup>い</sup>るのであるが、それが段<sup>だ</sup>々<sup>だん</sup>度<sup>たび</sup>重<sup>かさ</sup>なれば重<sup>かさ</sup>な程<sup>ほど</sup>、堪<sup>たま</sup>らなく、終<sup>つい</sup>には咽<sup>のど</sup>喉<sup>あた</sup>の辺<sup>あた</sup>りまでがむずむずして来<sup>く</sup>るよ<sup>かん</sup>うな感<sup>かん</sup>じがして来<sup>き</sup>た。

(十六)

或<sup>ある</sup>日<sup>ひ</sup>郵<sup>ゆう</sup>便<sup>びん</sup>局<sup>きょく</sup>長<sup>ちやう</sup>ミハイル、アウエリヤヌイチは、中<sup>ちゆう</sup>食<sup>じき</sup>後<sup>ご</sup>にア<sup>あ</sup>ンド<sup>ん</sup>レ<sup>い</sup>、エ<sup>え</sup>ヒミ<sup>ち</sup>チの所<sup>ところ</sup>を訪<sup>ほう</sup>問<sup>もん</sup>した。ア<sup>あ</sup>ンド<sup>ん</sup>レ<sup>い</sup>、エ<sup>え</sup>ヒミ<sup>ち</sup>チはやはり例<sup>れい</sup>の長<sup>なが</sup>椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>の上<sup>うえ</sup>。すると丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>ハバト

フもブローミウム加里の壇を携えて遣つて来た。アンドレイ、エヒミチは重そうに、辛そうに身を起して腰を掛け、長椅子の上に両手を突張る。

『いや今日は、おお君は今日は顔色が昨日よりもまたずつといいですよ。まず結構だ。』と、ミハイル、アウエリヤヌイチは挨拶する。

『もう全快してもいいでしょう。』とハバトフは欠をしながら言を添える、

『平癒りますとも、そうしてもう百年も生きまさあ。』と、郵便局長は愉快に云う。

『百年でそれも行かんでしようが、二十年やそこらは生き延びますよ。』ハバトフは慰め顔。『何んでもありませんさ、なあ同僚。悲観ももう大抵になさるがいいですよ。』

『我々はまだ隠居するには早いです。ハハハそうでしょうドクトル、まだ隠居するのには。』郵便局長は云う。

『来年辺はカフカズへ出掛けようじゃありませんか、乗馬でこれからあちこちを駆け廻りましょう。そうしてカフカズから帰ったら、こんどは結婚の祝宴でも挙げるようになりましょう。』と片眼をパチパチして。『是非一つ君を結婚させよう……ねえ、結婚を。』

アンドレイ、エヒミチはむかつとして立上った。

『失敬な！』と、一言※ぶなりドクトルは窓の方に身を退け。『全体貴方々はこ

んな失敬なことを言っていて、自分では気が着かんのですか。』

柔かに言う意であつたが、意に反して荒々しく拳をも固めて頭上に振翳した。

『余計な世話は焼かんでもいい。』ますます荒々しくなる。

『二人ながら帰って下さい、さあ、出て行きなさい。』

自分の声では無い声で顫えながら※ぶ。

ミハイル、アウエリヤヌイチとハバトフとは呆氣に取られて瞠めていた。

『二人とも、さあ出てお行でなさい。さあ。』アンドレイ、エヒミチはまだ※び続けてい

る。『鈍痴漢の、薄鈍な奴等、薬も糸瓜もあるものか、馬鹿な、軽拳な！』ハバ

トフと郵便局長とは、この権幕に辟易して戸口の方に狼狽出て行く。ドクト

ルはその後を睨めていたが、ゆきなりブローミウム加里の壘を取るより早く、発矢とばか

りそこに投付る、壘は微塵に粉碎してしまう。

『畜生！行け！さっさと行け！』と彼は玄関まで駈出して、泣声を上げて怒

鳴る。『畜生！』

客等が立去つてからも、彼は一人でまだしばらく悪体を吻いている。しかし段々と落着くに随つて、さすがにミハイル、アウエリヤヌイチに対しては気の毒で、定めし恥に入っていることだろうと思えば。ああ思慮、知識、解悟、哲学者の自若、それ將た安にか在ると、彼はひたすらに思うて、慙じて、自ら赤面する。

その夜は慙恨の情に駆られて、一睡だもせず、翌朝遂に意を決して、局長の所へと詫に出掛る。

『いやもう過去は忘れましょう。』と、ミハイル、アウエリヤヌイチは固く彼の手を握つて云うた。『過去のことを思い出すものは、両眼を抉つてしまひましょう。リュバフキン!』と、彼は大声で誰かを呼ぶ。郵便局の役員も、来合わしていた人々も、一斉に吃驚する。『椅子を持つて来い。貴様は待つておれ。』と、彼は格子越に書留の手紙を彼に差出している農婦に怒鳴り付る。『俺の用のあるのが見えんのか。いや過去は思い出しますまい。』と彼は調子を一段と柔しくしてアンドレイ、エヒミチに向つて云う。『さあ君、掛け給え、さあどうか。』

一分間黙して両手で膝を擦つていた郵便局長はまた云出した。

『私は決して君に対して立腹は致さんので、病氣なれば抛無いのです、お察し申

すですよ。昨日も君が逆上られた後、私はハバトフと長いこと、君のことを相談しました。がね、いや君もこんどは本気になつて、病気の療治を遣り給わんといかんです。私は友人として何も彼も打明けます。』と、彼は更に続けて。『全体君は不自由な生活をしてるので、家と云えば清潔でなし、君の世話をする者は無し、療治をするには銭は無し。ねえ君、で我々は切に君に勧めるのだ。どうぞ是非一つ聴いて頂きたい、と云うのは、実はそう云う訳であるから、寧君は病院に入られた方が得策であろうと考えたのです。ねえ君、病院はまだ比較的、食物はよし、看護婦はいる、エウゲニイ、フェオドロイチもいる。それは勿論、これは我々だけの話だが、彼は余り尊敬をすべき人格の男では無いが、術に掛けてはまたなかなか侮られんと思う。で願くはだ、君、どうぞ一つ充分に彼を信じて、療治を専一にして頂きたい。彼も私にきつと君を引受けると云つていたよ。』

アンドレイ、エヒミチはこの切なる同情の言と、その上涙をさえ頬に滴らしている郵便局長の顔を見て、酷く感動して徐に口を開いた。

『君は彼等を信じなされるな。嘘なのです。私の病氣と云うのはそもそもそのようなのです。二十年来、私はこの町にいてただ一人の智者に遇った。所がそれは狂人であると言う、

これだけの事実です。で私も狂人にされてしまったのです。しかしなあに私はどうでもいいので、からしてつまり何にでも同意を致しましょう。』

『病院へお入りなさい、ねえ君。』

『左様、どうでもいいです、よしんば穴の中に入るのでも。』

『で、君は万事エウゲニイ、フエオドロイチの言に従うように、ねえ君、頼むから。』

『宜しい、私は今は実以て二ちも三ちも行かん輪索に陥没ってしまったのです。もう万事休矣です覚悟はしています。』

『いやきつと平癒ですよ。』

格子の外には公衆が次第に群つて来る。アンドレイ、エヒミチは、ミハイル、アウエリヤヌイチの公務の邪魔をするのを恐れて、話はそれだけにして立上り、彼と別れて郵便局を出た。

丁度その日の夕方、ドクトル、ハバトフは例の毛皮の外套に、深い長靴、昨日は何事も無かつたような顔で、アンドレイ、エヒミチをその宿に訪問ねた。

『貴方に少々お願があつて出たのですが、どうぞ貴方は私と一つ立合診察をしては下さらんか、如何でしょう。』と、さり気なくハバトフは云う。

アンドレイ、エヒミチはハバトフが自分を散歩に誘つて氣晴をさせようと云うのか、或はまた自分にそんな仕事を授けようと云う意なのかと考えて、とにかく服を着換えて共に通に出たのである。彼はハバトフが昨日のことは噫にも出さず、かつ氣にも掛けていぬような様子を見て、心中一方ならず感謝した。こんな非文明的な人間から、かかる思遣りを受けようとは、全く意外であつたので。

『貴方の有仰る病人はどこなのです？』アンドレイ、エヒミチは問うた。

『病院です、もう疾うから貴方にも見て頂きたいと思つていましたのですが……妙な病人なのです。』

やがて病院の庭に入り、本院を一周して瘋癲病者の入れられたる別室に向つて行つた。ハバトフはその間何故か黙したまま、さつさと六号室へ這入つて行つたが、ニキタは例の通り雑具の塚の上から起上つて、彼等に礼をする。

『肺の方から来た病人なのです。』とハバトフは小声で云うた。『や、私は聴診器を忘れて来た、直ぐ取つて来ますから、ちよつと貴方はここでお待ち下さい。』

と彼はアンドレイ、エヒミチをここに一人残して立去つた。



## (十七)

日はすでに没した。イワン、デミトリチは顔を枕に埋めて寢台の上に横になっている。中風患者は何か悲しそうに静に泣きながら、唇を動かしている。肥った農夫と、郵便局員とは眠っていて、六号室の内は闇として静かであった。

アンドレイ、エヒミチは、イワン、デミトリチの寢台の上に腰を掛けて、大よ半時間も待つていと、室の戸は開いて、入つて来たのはハバトフならぬ小使のニキタ。病院服、下着、上靴など、小腋に抱えて。

『どうぞ閣下これをお召し下さい。』と、ニキタは前院長の前に立つて丁寧云うた。『あれが閣下のお寢台で。』と、彼は更に新しく置れた寢台の方を指して。『何でもありません。必ず直に御全快になります。』

アンドレイ、エヒミチはここに至つて初めて読めた。一言も言わずに彼はニキタの示した寢台に移り、ニキタが立つて待つていたので、直ぐに着ていた服をすッぽりと脱ぎ棄て、病院服に着換えてしまった。シャツは長し、ズボン下は短かし、上着は魚の焼いた臭がする。『きつと間もなくお直りでしょう。』と、ニキタはまた云うてアンドレイ、エヒ

ミチの脱捨た服を一纏めにして、小腋に抱えたまま、戸を閉てて行く。

『どうでもいい……。』と、アンドレイ、エヒミチは体裁悪そうに病院服の顔を掻合

わせて、さも囚人のようだと思ひながら、『どうでもいいわ……。燕尾服だろうが、

軍服だろうが、この病院服だろうが、同じことだ。』

『しかし時計はどうしたろう、それからポケットに入れて置いた手帳も、巻蓑も、

や、ニキタはもう着物を悉皆持つて行つた。いや入らん、もう死ぬまで、ズボンや、チ

ヨッキ、長靴には用が無いのかも知れん。しかし奇妙な成行さ。』と、アンドレイ、

エヒミチは今もなおこの六号室と、ベローワの家と何の異りも無いと思うていたが、ど

う云うものか、手足は冷えて、顫えてイワン、デミトリチが今にも起きて自分のこの姿を

見て、何とか思うだろうと恐いような氣もして、立つたり、いたり、また立つたり、歩

いたり、ようやく半時間、一時間ばかりも坐つていて見たが、悲しい程退屈になつて

来て、どうしてこんな処に一週間といられよう、まして一年、二年など到底辛棒

をされるものでないと思ひ付いた。そう思えばますます居堪らず、衝と立つて隅から隅へ

と歩いて見る。『そうしてからどうする、ああ到底居堪らぬ、こんな風で一生!』

彼はどっかり坐つた、横になつたがまた起直る。そうして袖で額に流れる冷汗を拭

いたが顔中焼魚の腥い臭がして来た。彼はまた歩き出す。『何かの間違いだらう……話合つて見にや解らん、きつと誤解があるのだ。』

イワン、デミトリチはふと眼を覚し、脱然とした様子で両の拳を頬に突く。唾を吐く。初めちよつと彼には前院長に気が付かぬようであつたがやがてそれと見て、その寐惚顔には忽ち冷笑が浮んだので。

『ああ貴方もここへ入れられましたのですか。』と彼は噎れた声で片眼を細くして云うた。『いや結構、散々人の血をこうして吸つたから、こんどは御自分の吸われる番だ、結構々々。』

『何かの多分間違です。』とアンドレイ、エヒミチは肩を縮めて云う。『間違に相違ないです。』

イワン、デミトリチはまたも床に唾を吐いて、横になり、そうして呟いた。『ええ、生甲斐の無い生活だ、如何にも残念なことだ、この苦痛な生活がオペラにあるような、アポテオズで終るのではなく、これがああ死で終るのだ。非人が来て、死者の手や、足を捉えて穴の中に引込んでしまふのだ、うッふ！ だが何でもない……その換り俺は彼の世から化けて来て、ここらの奴等を片端から嚇してくれる、皆白髪にしてしまつて遣る

『折しもモイセイカは外から帰り来り、そこに前院長のいるのを見て、直に手を延し、一銭お呉なさい!』

(十八)

アンドレイ、エヒミチは窓の所に立つて外を眺むれば、日はもうとツぷりと暮れ果てて、むこうの野広い畑は暗かったが、左の方の地平線上より、今しも冷たい金色の月が上る所、病院の塀から百歩ばかりの処に、石の牆の繞らされた高い、白い家が見える。これは監獄である。

『これが現実と云うものか。』アンドレイ、エヒミチは思わず慄然とした。

凄然たる月、塀の上の釘、監獄、骨焼場の遠い焰、アンドレイ、エヒミチはさがすがに薄気味悪い感に打たれて、しょんぼりと立っている。と直後に、吐とばかり溜息の音がする。振り返れば胸に光る徽章やら、勲章やらを下げた男が、ニヤリとばかり片眼をパチパチと、自分を見て笑う。

アンドレイ、エヒミチは強いて心を落着けて、何の、月も、監獄もそれがどうなのだ、  
 壮健な者も勲章を着けているではないか。と、そう思返したものの、やはり失  
 望は彼の心によいよ募つて、彼は思わず両の手に格子を捉え、力儘せに揺動つた  
 が、堅固な格子はミチリとの音もせぬ。

荒涼の氣に打たれた彼は、何かなして心を紛らさんと、イワン、デミトリチの寢台  
 の所に行つて腰を掛ける。

『私はもう落胆してしまいましたよ、君。』と、彼は顫声して、冷汗を拭きなが  
 ら。『全く落胆してしまいました。』

『では一つ哲学の議論でもお遣なさい。』と、イワン、デミトリチは冷笑する。

『ああ絶体絶命……そうだ。何時か貴方は露西亜には哲学は無い、しかし誰も、彼  
 も、丁斑魚でさえも哲学をすると有仰つたつけ。しかし丁斑魚が哲学をすればつて、  
 誰にも害は無いのでしよう。』アンドレイ、エヒミチはいかにも情無いと云うような声  
 をして。『どうして君、そんなにいい氣味だと云うような笑顔をされるのです。幾ら  
 丁斑魚でも満足を得られんなら、哲学をせずにはおられندしよう。いやしくも智慧  
 ある、教育ある、自尊ある、自由を愛する、即ち神の像たる人間が。ただに医者と

して、辺鄙なる、蒙昧なる片田舎に一生、壇や、蛭や、芥子粉だのを弄っているより外に、何の爲すことも無いのでしょうか、詐欺、愚鈍、卑劣漢、と一所になって、いやもう！』

『下らんことを貴方は零していなさる。医者がいやなら大臣にでもなつたらいいでしょう。』

『いや、どこへ行くのも、何を遣るのも望まんです。考えれば意気地が無いものさ。これまでは虚心平気で、健全に論じていたが、一朝生活の逆流に触るや、直に気は挫けて落胆に沈んでしまった……意気地が無い……人間は意気地が無いものです、貴方とてもやはりそうでしょう、貴方などは、才智は勝れ、高潔ではあり、母の乳と共に高尚な感情を吸込まれた方ですが、実際の生活に入るや否、直に疲れて病気になるってしまわれたです。実に人は微弱なものだ。』

彼には悲愴の感の外に、まだ一種の心細き感じが、殊に日暮よりかけて、しんみりと身に泌みて覚えた。これは麦酒と、苳とが、欲しいのであつたと彼も終に心着く。

『私はここから出て行きますよ、君。』と、彼はイワン、デミトリチにこう云うた。『ここへ灯を持って来るように言付けますから……どうしてこんな真暗な所にいられましよ

う……我慢し切れません。』

アンドレイ、エヒミチは戸口の所に進んで、戸を開けた。するとニキタが躍上て来て、その前に立塞る。

『どちらへ！ いけません、いけません！』と、彼は※ぶ。『もう眠る時ですぞ！』

『いやちと庭を歩いて来るのだ。』と、アンドレイ、エヒミチは怖々する。

『いけません、いけません！ そんなことをさせてもいいとは誰からも言付かりません。御存じでしょう。』

云うなりニキタは戸をぱたり。そうして背を閉めた戸に当ててやはりそこに仁王立。

『しかし俺が出たつてそれが為に誰が何と云う。』アンドレイ、エヒミチは肩を縮る。

『訳が分らん、おいニキタ俺は出なければならんだ！』彼の声は顫える。『用があるのだ！』

『規律を乱すことは出来ません、いけません！』とニキタは諭すような調子。

『何だと畜生！』と、この時イワン、デミトリチは急にむツくりと起上る。『何で彼奴が出さんと云う法がある、我々をここに閉込めて置く訳は無い。法律に照しても明白だ、何人と雖、裁判もなくして無暗に人の自由を奪うことが出来るものか！』

不埒だ！ 压制だ！』

『勿論不埒ですとも。』アンドレイ、エヒミチはイワン、デミトリチの加勢にとみに力を得て、気が強くなり。『俺は用があるのだ！ 出るのだ！ 貴様に何の権利がある！』

出せと云つたら出せ！』

『解つたか馬鹿野郎！』と、イワン、デミトリチは※んで、拳を固めて戸を敲く。『やい開けろ！ 開けろ！ 開けんか！ 開けんなら戸を打破すぞ！ 人非人！ 野獣！』

『開けろ！』アンドレイ、エヒミチは全身をぶるぶると顫わして。『俺が命ずるのだッ

！』

『もう一度言つて見ろ！』戸のむこうでニキタの声。『もう一度言つて見ろ！』

『じゃ、エウゲニイ、フェオドロイチでもここへ呼んで来い、ちよつと俺が来てくれッて云つているとそう云え……ちよつとでいいからッて！』

『明日になればお出でになります。』

『何日になつたつて我々を決して出すものか。』イワン、デミトリチは云う、『我々をここで腐らしてしまふ料簡だろう！ 来世に地獄がなくて為るものか、こんな人非人共がどうして許される、そんなことで正義はどこにある、えい、開けろ、畜生』



！』<sup>かれしやが</sup>彼は<sup>こえ</sup>嗔れた<sup>しほ</sup>声を絞つて、戸に<sup>なげか</sup>身を投掛け。『<sup>きさま</sup>いいか、<sup>あたまた</sup>貴様の頭を<sup>たた</sup>敲き<sup>わ</sup>破るぞ！<sup>ひとご</sup>人殺奴！』

ニキタはぱつと戸を開けるより、阿修羅王の荒れたる如く、両手と膝でアンドレイ、エヒミチを突<sup>つきとば</sup>飛し、骨も砕けよとその鉄拳<sup>てつけん</sup>を真向<sup>まっこう</sup>に、健<sup>したた</sup>か彼の<sup>かれ</sup>顔を<sup>かお</sup>敲き<sup>たた</sup>据<sup>す</sup>えた。アンドレイ、エヒミチはアツと云つたまま、緑<sup>みどりいろ</sup>色の<sup>おおなみ</sup>大浪<sup>あたまた</sup>が頭<sup>うちかぶ</sup>から打<sup>うち</sup>被<sup>かぶ</sup>さつたように感じて、<sup>ねだい</sup>寢台の上に引<sup>ひ</sup>いて行<sup>ゆ</sup>かれたような心地。口の中には<sup>しおけ</sup>塩氣<sup>おほ</sup>を覚<sup>おぼ</sup>えた、大方<sup>おおかた</sup>齒から<sup>ねだい</sup>の出血<sup>しゅつけつ</sup>であろう。彼は泳<sup>およ</sup>がんとするもののように両手<sup>りやうて</sup>を動<sup>うご</sup>かして、誰<sup>たれ</sup>やらの<sup>ねだい</sup>寢台にようよう取<sup>とり</sup>縫<sup>ぬ</sup>つた。とまたもこの時<sup>とき</sup>振<sup>ふ</sup>下<sup>おろ</sup>したニキタの第二<sup>だいに</sup>の鉄拳<sup>てつけん</sup>、背骨<sup>せぼね</sup>も歪<sup>ゆが</sup>むかと悶<sup>もだ</sup>ゆる暇<sup>ひま</sup>もなく打<sup>うち</sup>続<sup>つづ</sup>て、またまた三度<sup>さんど</sup>目の鉄拳<sup>てつけん</sup>。

イワン、デミトリチはこの時<sup>とき</sup>高<sup>たか</sup>く※声<sup>こゑ</sup>。彼も打<sup>ぶ</sup>たれたのであろう。

それよりは室<sup>しつ</sup>内<sup>ない</sup>また音<sup>おと</sup>もなく、ひっそりと静<sup>しず</sup>ま返<sup>かえ</sup>つた。折<sup>おり</sup>から淡々<sup>あわあわ</sup>しい月の光<sup>つきひかり</sup>、鉄<sup>て</sup>窓<sup>そう</sup>を洩<sup>も</sup>れて、床<sup>ゆか</sup>の上に網<sup>あみ</sup>に似<sup>に</sup>たる如<sup>ごと</sup>き墨画<sup>すみえ</sup>を夢<sup>ゆめ</sup>のように浮<sup>う</sup>出<sup>きだ</sup>したのは、謂<sup>い</sup>うようなく、凄<sup>せい</sup>絶<sup>ぜつ</sup>また惨<sup>さん</sup>絶<sup>ぜつ</sup>の極<sup>きわみ</sup>であつた、アンドレイ、エヒミチは横<sup>よこ</sup>たわつたまま、まだ息<sup>いき</sup>を殺<sup>ころ</sup>して、身<sup>み</sup>を縮<sup>ちぢ</sup>めて、もう一度<sup>どぶ</sup>打<sup>ぶ</sup>たればせぬかと待<sup>まち</sup>構<sup>かま</sup>えている。と、忽<sup>たちま</sup>ち覚<sup>おほ</sup>ゆる胸<sup>むね</sup>の苦痛<sup>くつう</sup>、腸<sup>ちよう</sup>の疼痛<sup>とうつう</sup>、誰<sup>たれ</sup>か鋭<sup>えい</sup>き鎌<sup>かま</sup>を以<sup>もつ</sup>て、剗<sup>えぐ</sup>るにはあらぬかと思<sup>おも</sup>わる程<sup>ほど</sup>、彼は枕<sup>かれまくら</sup>に強<sup>しが</sup>攫<sup>が</sup>み着<sup>つ</sup>き、き

りりと齒をば切る。今ぞ初めて彼は知る。その有耶無耶になつた脳裡に、なお朧朦朧氣に見  
た、月の光に輝し出されたる、黒い影のようなこの室の人々こそ、何年と云うことは  
無く、かかる憂目に遭わされつつありしかと、堪え難き恐しきは電の如く心の中に閃き渡  
つて、二十有余年の間、どうして自分はこれを知らざりしか、知らんとはせざりしか。  
と空恐しく思うのであつたが、また剛情我慢なるその良心は、とは云え自らはい  
まだかつて疼痛の考えにだにも知らぬのであつた、しからば自分が悪いのでは無いので  
あると囁いて、さながら襟下から冷水を浴びせられたように感じた。彼は起上つて声  
限りに※び、そうしてここより拔出でて、ニキタを真先に、ハバトフ、會計、代  
診を塵殺にして、自分も續いて自殺して終おうと思つた。が、どうしたのか声は咽  
喉から出でず、足もまた意の如く動かぬ、息さえ塞つてしまひそうに覺ゆる甲斐なさ。彼  
は苦しさに胸の辺を掻き毟り、病院服も、シャツも、ぴりぴりと引裂くのであつたが、  
やがてそのまま氣絶して寢台の上に倒れてしまつた。

翌朝彼は激しき頭痛を覚えて、両耳は鳴り、全身には只ならぬ悩を感じた。そうして昨日の身に受けた出来事を思い出して、恥しくも何とも感ぜぬ。昨日の小胆であつたことも、月さえも気味悪く見たことも、以前には思いもしなかつた感情や、思想を有のままに吐露したこと、即ち哲学をしている丁斑魚の不満足のことを云うたことなども、今は彼に取つて何でもなかつた。

彼は食わず、飲まず、動きもせず、横になつて黙っていた。

『ああもう何も彼もない、誰にも返答などするものか……もうどうでもいい。』と、彼は考へていた。

中食後ミハイル、アウエリヤヌイチは茶を四半斤と、マルメラドを一斤持参つて、彼の所に見舞に來た。続いてダリユシカも來、何とも云えぬ悲しそうな顔をして、一時間も旦那の寢台の傍にじつと立たままで、それからハバトフもブローミウム加里の壘を持つて、やはり見舞に來たのである。そうして室内に何か香を薫ゆらすようにとニキタに命じて立去つた。

その夕方、俄然アンドレイ、エヒミチは脳充血を起して死去してしまつた。初め彼は寒氣を身に覚え、吐氣を催して、異様な心地悪しさが指先にまで染渡ると、何か

胃から頭に突上げて来る、そうして眼や耳に掩い被さるような気がする。青い光が眼に閃く。彼は今すでにその身の死期に迫つたのを知つて、イワン、デミトリチや、ミハイル、アウエリヤヌイチや、また多数の人の靈魂不死を信じているのを思い出し、もしそんなことがあつたらばと考えたが、靈魂の不死は、何やら彼には望ましくなかった。そうしてその考えはただ一瞬間にして消えた。昨日読んだ書中の美しい鹿の群が、自分のそばを通つて行つたように彼には見えた。こんどは農婦が手に書留の郵便を持つて、それを自分に突出した。何かミハイル、アウエリヤヌイチが云うたのであるが、直に皆掻消えてしまった。かくてアンドレイ、エヒミチは永劫覚めぬ眠には就いた。

下男共は来て、彼の手足を捉り、小聖堂に運び去つたが、彼が眼いまだ瞑せずして、死骸は台の上に横臥っている。夜に入つて月は影暗く彼を輝した。翌朝セルゲイ、セルゲイチはここに来て、熱心に十字架に向つて祈祷を捧げ、自分等が前の院長たりし人の眼を合したのであつた。

一日を経て、アンドレイ、エヒミチは埋葬された。その祈祷式に預つたのは、ただミハイル、アウエリヤヌイチと、ダリユシカとで。





## 青空文庫情報

底本：「明治文學全集 82 明治女流文學集（二）」筑摩書房

1965（昭和40）年12月10日発行

1989（平成元）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「露国文豪 チエホフ傑作集」獅子吼書房

1908（明治41）年10月

初出：「文藝界」

1906（明治39）年4月

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

「此の」は「この」、「又」は「また」、「於て」は「おいて」、「毎も」は「いつも」、「何処」は「どこ」、「慙う」は「こう」、「其」は「その」または「それ」、「是」は「これ」または「この」、「丈」は「だけ」、「計り」は「ばかり」、「凝と」は「じつと」、「為た」は「した」、「些し」は「すこし」、「為て」は「して」、「然し」は

「しかし」、「猶且」は「やはり」、「其れ」は「それ」、「事」は「こと」、「左に右」は「とにかく」、「儘」は「まま」、「而して」は「そうして」、「了う」は「しまう」、「呉れ」は「くれ」、「悉皆」は「すっかり」、「有った」は「あった」、「慍く」は「かく」、「唯」は「ただ」、「可い」は「いい」または「よい」、「有って」は「あつて」または「もって」、「先ず」は「まず」、「施て」は「やがて」、「然るに」は「しかるに」、「此度」は「こんど」、「亦」は「また」、「了った」は「しまった」、「此」は「ここ」または「かく」、「初中終」は「しよつちゆう」、「往々」は「まま」、「居る」は「いる」または「おる」、「是等」は「これら」、「為なければ」は「しななければ」、「杯」は「など」、「偕」は「さて」、「有る」は「ある」、「屢※」[#二の字点、1-2-22]は「しばしば」、「縦令」は「よし」または「たとい」または「よしんば」、「屹度」は「きつと」、「奈何」は「どう」または「いかん」または「いか」、「不好」は「いや」、「為ぬ」は「せぬ」、「有り」は「あり」、「抑も」は「そもそも」、「有たぬ」は「もたぬ」、「這麼」は「こんな」、「此れ」は「これ」、「若し」は「もし」、「那樣」は「そんな」、「愈々」は「いよいよ」、「全然」は「すっかり」または「まるきり」または「まるで」、「猶」は「なお」、「密と」は「そつと」、「那麼」は「あん



な」または「こんな」、「乃」は「そこで」、「然」は「そう」または「しかし」、「未  
 だ」は「まだ」または「いまだ」、「然う」は「そう」、「※」#「勺<夕」、第3水準  
 1-14[6] 卒」は「いきなり」、「有ゆる」は「あらゆる」、「些と」は「ちよつと」、  
 「恰で」は「まるで」、「丈け」は「だけ」、「迄」は「まで」、「宛然」は「まるで」  
 または「さながら」、「猶更」は「なおさら」、「為ねば」は「せねば」、「恚る」は  
 「かかる」、「且つ」は「かつ」、「只管」は「ひたすら」、「茲」は「ここ」、「若」  
 は「もし」、「切て」は「せめて」、「可く」は「よく」、「好く」は「よく」、「全然  
 で」は「まるで」、「此所」は「ここ」、「度い」は「たい」、「毎」は「いつも」、  
 「為よう」は「しよう」、「好い」は「いい」または「よい」、「已」は「すで」、「依  
 然」は「やはり」、「尤も」は「もつとも」、「如何」は「どう」、「而て」は「して」、  
 「然れども」は「けれども」、「唯だ」は「ただ」、「此方」は「このかた」、「度く」  
 は「たく」、「嘗つて」は「かつて」、「其処」は「そこら」または「そこ」、「此処」  
 は「ここ」、「居つて」は「おつて」、「甚麼」は「どんな」、「可かろう」は「よかろ  
 う」、「居らん」は「おらん」、「畢竟」は「つまり」、「可けません」は「いけません  
 」、 「最と」は「いと」、「仮令」は「たとい」、「之れ」は「これ」、「嘗て」は「か

つて」、「何卒」は「どうぞ」または「どうか」、「仕よう」は「しよう」、「何方」は「どちら」、「居り」は「おり」、「為ない」は「しない」、「然らば」は「しからば」、「抑」は「そもそも」、「那」は「あれ」または「ああ」、「益※」[#二の字点、12-22「」は「ますます」、「有つ」は「もつ」、「仕て」は「して」、「仕ない」は「しない」、「丁と」は「ちゃんと」、「左右」は「とかく」、「居らぬ」は「おらぬ」、「未」は「いまだ」、「少時」は「すこし」または「しばし」または「しばらく」、「匆卒」は「いきなり」または「ゆきなり」、「暫」は「やや」、「然り」は「さり」、「態々」は「わざわざ」、「沁々」は「しみじみ」、「左様」は「そう」、「夫れ」は「それ」、「為ず」は「せず」、「其辺」は「そこら」、「彼方此方」は「あちこち」、「有繋」は「さすが」、「可かん」は「いかん」、「好し」は「よし」、「度」は「たい」、「復」は「また」、「計」は「ばかり」、「況して」は「まして」、「苟も」は「いやしくも」、「那方」は「むこう」、「些と」は「ちと」、「頓に」は「とみに」、「那裏」は「むこう」に、置き換えました。

※「※」[#「ノ+臣+頁」]は、「頤」に書き換えました。

※「※」[#「拔」の「友」に代えて「ノ／友」]は「拔」に書き換えました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「理窟」と「理屈」、「踏」と「蹈」、「勿」と「※」[#「ㄅ」夕」、第3水準1-1476「」の混在は底本通りです。

※仮名表記と繰り返し記号の使い方の揺れは、底本通りです。

入力：阿部哲也

校正：米田

2011年1月20日作成

2011年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 六号室

アントン・チェホフ Anton Chekhov

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 瀬沼夏葉訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>